

土

淨

號 月 十



昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十六年九月廿日印刷納本 昭和十六年十月一日發行

第七卷

第十號

陸海軍 慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

告豫刊近

中
村
辨
康
著

日常勤行式講讀

「日常のおつとめ」と經文の解説とを兼ねた便利な修養書！
座右に備へて正しい信仰に精進せられよ！

浄土宗で必要なお經文を全部納めて誰にでも解るやうに一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯とをあげ、それに中村師獨特の麗筆を以て懇切な解説をほどこし、更に字解までつけて一讀よくその深底を味ひ得るもの。
會員各位の佛壇に供へて修養に最適です。僧侶各位の書架に一書を加へて手近かな修養の參考資料となり、説教その他の教材に最も便利です。

B 6 型 クロース 装

發行所 法然上人鑽仰會

價一圓五十錢

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

淨土十月號 目次

表紙

中島

保

扉・目次カッ

齋藤

清

お十夜随想

高瀬承嚴(五)

秋 日 夜

吉田絃二郎(三)

自分を何うする……………西村伊作(三)

病者の悩みに應へて……………榮久庵凡藏(三)

實話集 蓮華を母とし……………木村鈴信(五)
父の死……………秀禪(五)
妙好人のこと……………吉水善微(五)

實話 或る病兵の手紙……………編輯部(六)

信

仰

相

談

中村辨康(三)

新刊「法然佛教とわが國體思想」を讀む……………(二)

歌壇……………與謝野 晶子選……………(三五)

俳壇……………太田 耳動子選……………(四)

柳壇……………西島 ○ 丸選……………(五)

淨土まん畫 秋 たけなは……………漫畫協團……………(五)

僕の發見 菩薩さまがゐる……………稻 荷 弘 信……………(六)

童話 勇敢なビボー……………小林 一……………(三)

小 庵 に て……………子母澤 寛……………(四)

商船學校と淨土……………山本 幹 夫……………(一五)

聖典 講義 佛を見るもの……………中村 辨 康……………(五)

會 員 通 信……………(五六)
編 輯 後 記……………(六五)

淨土十月號 目次

中里介山著
法然上人傳

(三六版 二五〇頁)
定價 六十錢
送料 六錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一〇頁總ルビ付)
念佛讀本
定價 二十錢
送料 三錢

中村辨康著
信仰讀本

(四六版八〇頁總ルビ付)
定價 二十錢
送料 三錢

藤井實應編
法然上人法語抄

(菊半截一四四頁總ルビ付)
定價 三十錢
送料 六錢

佐藤春夫著
法然上人掬水譚

特製ノート型、天金
十二ボ總ルビ、三〇〇頁
定價 四圓五十錢
送料 二十二錢

文豪の手による古典の通俗化！法然上人傳として最も權威ある「勅修御傳」を、雅文をそのまゝにして、しかも安易に一讀出来るもの、法然上人を知らんとするには先づ傳記から始められよ！

生、死、佛、本願、信と行、念佛の集ひ、社會生活、女性、家庭生活念佛の意義の各項目に別けて本宗の新鋭が、一般讀者を目標に新鮮な材料によつて解説した念佛信仰の手引！

非常時局下、人心の確固たる統一を期する時、一道の光明燦然として信仰の正道を指し示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩瀚なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んで句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

淨 土

十月號

念佛にうたがひをなし、
不審をおこさんものは、
いふにたらぬほどの事に
てこそは候はめ、おほか
た彌陀に縁あさく、往生
に時いたらぬものは、き
けど信ぜず、おこなふを
見でははらをたて、いか
りをふくみて、きまたげ
んとする事にて候。

法然上人御法語





(一)

あなたふと茶もだぶくと十夜かな
木々もみな坊主になれと十夜かな
木枕を寺にかり寝の十夜かな
夜ありきの子に門で逢ふ十夜かな
我が戀は婆になりたる十夜かな

お

十

夜

隨

想

極樂淨土を想はす 眞如堂の十夜法ほう法ほう

高 瀬 承 嚴

○

お十夜はあんじるほどの旅でなし
神々のお留守に威張る蛸十夜
十夜からよほどよりかと母は聞き
そうばんが鳴りやすと嫁舌を出す
とんだこと十夜を南もん日なり

(二)

江戸時代の日常生活に親しまれてゐた俳諧と川柳とを、十夜に
因んで十首出してみた。これらを見ても、お十夜が、どれほどあ
の時代の人々に楽しい行事であつたかが想像され、又、この行事

が、どれほどあの時代の人々に信仰を植ゑつけるに力を添へたかも測り知ることが出来ない。

引聲念佛の伴奏樂器である雙盤のガン／＼と響いてくる音、それに伴ふてドン／＼と聞えてくる太鼓の音は、たとへそれが時と所とが變つても、十夜の行はれる十月になると、とてもなつかしい思出となる。京都の吉田山は、日本全國の神様が祠られてあるといはれてゐる。その山の裏にある眞如堂から響いてくる十夜の鉦の音は、京都市民とは切つても切れぬ深い因縁をもつてゐる。上にあげた「神々のお留守に威張る蛸十夜」は、眞如堂の十夜を讀んだもので、十月の神無月、吉田山の神様が、出雲へ旅行して居られて、京都は神様が御木立である、ほんとうの佛都となつた時、十月の六日から十五日まであけてもくれても、ガン／＼と鳴る鉦の音とともに稱名の聲で京都は充たされてしまふと云つてゐるのである。

(三)

京都の眞如堂は、天台宗のお寺で、本尊様は生身の阿彌陀様が安置されてゐるとの信仰から眞正極樂寺と名づけられ、嵯峨の清凉寺の本尊様は、お釋迦様が初利天に往生してゐらしやるお母様に御說法に行つてゐらした時、お釋迦様が御留守(三ヶ月)なのを歎いて、當時印度第一の彫刻師毘首羯磨に作らしめたと傳へら

れてゐるお釋迦様の像が、その後、支那を経て日本に傳へられたといふ、いはゆる三國傳來のお釋迦様とともに、鎌倉時代には参籠者の絶えなかつた寺である。このお寺で十夜が始めるるに至つたについては、眞如堂縁起によると、後花園天皇の御世、將軍足利義教の執權平貞經の子の貞國、願のことあつて眞如堂に参籠すること三日三夜、満願の朝、望の綱も切れはて、髪を切つて出家入道せんとした時、高僧あらはれ、汝、我を信ずるならば、未來には必ず淨土に往生すべく、且つ現世に於ける望は、今三日待てと、何となく洋々と輝く希望に充ちた夢を見た。夜の扉は東山から明けたので、家路を急いで歸り、しばらくすると、將軍家から、貞國に家督相續の命が下つた。

そこで貞國は、この恩命は眞如堂本尊の御加護によるものと、前の三日三夜に加ふるに今度は七日七夜参籠して佛事を行ひ、心からなる感謝の念を捧げた。貞國のこの行は、天聴に達して恩賞を賜ひ、これを因縁として、十日十夜の佛事を眞如堂に行はしめらるゝこととなり、この佛事には、慈覺大師が唐から傳へて來た引聲阿彌陀經を讀誦し引聲念佛を行ふことに定められたといふのである。

(四)

引聲阿彌陀經や引聲念佛を傳へた慈覺大師は、傳ふるところに

よると、極めて聲樂の下手な方であつたが、器樂を取扱ふことは天才的で、殊に管樂には勝れた天分を持って居られ、唐に留學中、佛敎學の研究とともに、佛敎音樂の研究も行ひ、曲節あるものは悉く管樂によりて修得して歸られた。長い留學が終へて歸國の船中、徒然なるままに修得の引聲阿彌陀經を復習してゐると、一節どうしても思ひ出せずに苦しんで居られると、天に聲ありて祕曲の傳授を受けたといはれてゐる。このやうにして傳へられた引聲阿彌陀經や引聲念佛も、若し眞如堂のお十夜が始まらなかつたなら、これほどまでに民衆的なものとはならなかつたと思はれる。

(五)

お十夜の根源地である京都の眞如堂のお十夜を、京都では蛸十夜と呼んでゐる。川柳に「神々のお留守に威張る蛸十夜」とあるは、眞如堂のを指すとともに、關東の十夜でも、寺の門前におでん屋が出て、蛸を煮て賣つてゐるのを讀んだものである。眞如堂で行はれるお十夜の十日間は、門前に屋臺店が軒を並べて蛸を賣つてゐる。本來ならば、葷と酒とは山門に入るを許さずと立札してゐる寺の門前に、而も勅諭に依りて始められたお十夜法要中、軒を並べて禁制品の一を賣るとは、矛盾もまた甚だしといふべきであるが、これは疫病除の呪になるといはれ、參詣の老若何れも食べるか、買はなければ歸らないといふ有様で、吉田山の吉田

神社で疫病除のお札を受けると好一對の京都情趣を示すものである。

(六)

關東方面で行はれるお十夜の鉦は、何れかといふと非音樂的である。中には曲打と云つて、撞木を天井までほうりあげて、もどつてくるのを巧に受けて次ぎの鉦を打つといふ、信仰方面、佛敎儀式方面から考へると、どうかと思はれる點もあるが、眞如堂で鳴らす鉦の音は、遂に吉田山を越へて町に聞えてくるのを靜に聞いてゐると誠に極樂淨土の八功德池の岸を洗ふ波の音や、晝夜六時に和雅の音を出すといはれる極樂淨土にある種々奇妙なる難色の鳥の鳴く音聲などに基いて引聲阿彌陀經や引聲念佛の曲節が作られたといはれてゐるが、まるでこれらの音を聞いてゐるやうな心地がせらるる。この微妙なる鉦の音階も、恐らく初めは、慈覺大師が修得された管樂器特に尺八から得たものであらう。佛會供養に尺八が用ひられたことは由來久しいもので、我が國では奈良朝から行はれ、その遺品は正倉院御物中に見ることが出来る。

(七)

眞如堂にのみ行はれたお十夜の法會が關東に行はれるに至つたに就ては、鎌倉光明寺の一代であり、品川願行寺の開山である觀

誓祐崇の努力に依るもので、關東で十夜といふと、鎌倉の十夜と誰しもが聯想するまでになり、従つて又關東一帯に盛に行はれ、今日に至るまで、十月から十一月にかけて、あちらでもこちらでもジャン／＼と鳴りひびく鉦の音を耳にし、これによりて念佛信仰を徹底せしめた祐崇の苦心を感謝しなければならぬ。

祐崇が、十夜法要を鎌倉に始めたのは、畏くも 後土御門天皇様のありがたい思召を拜したもので、彼は、當時淨土宗僧侶中、

陸海軍病院慰問「淨土」

寄附者芳名(略敬稱)

一圓八十錢	三重縣飯南郡樺田村	清水 亨龍
五 圓	大阪府西成區玉出町	吉川 ヒロ子
一圓二十錢	滋賀縣日野町	信 樂 院
一圓二十錢	神奈川縣大楠町	福 本 寺
一圓二十錢	佐賀縣佐賀郡西川副村	正 定 寺
一圓八十錢	大阪府南河内郡狹山	大原 祥光
五 圓	大阪府東淀川區南濱町	提 法 寺
一圓二十錢	横濱市中區最戸町	萩原卯之助
二圓四十錢	東京市京橋區木挽町	木村松太郎

學徳ともに秀でた名僧で、明應四年十月、勅を奉じて参内し、宮中で、眞如堂の大衆とともに引聲阿彌陀經と引聲念佛の法要を修し、淨土の要義を御進講申し上げた。歡感殊の外斜ならず、恩賞をとの優詔を拜したが、彼は謹んで拜辭し、御恩賞には、是非とも眞如堂に於てのみ行はるる十夜法要を關東に行ふことの御許しを頂戴したいと奏請に及んだ。すると、天皇様は彼の希望を御聽許遊ばされたから、彼は急ぎ、鎌倉に歸り、この法要を修行した。

八圓八十錢	愛知縣上野町	荒川 現有
一圓二十錢	松江市寺町	誓 願 寺
五 圓	和歌山市太田町	和歌山教務所
一圓二十錢	愛知縣西加茂郡舉母町	法 雲 寺
一圓二十錢	大阪府住吉區帝塚山中	澤 ノブ子
二圓五十錢	三重縣飯南郡伊勢寺村	龍 泉 寺
五 圓	岡山縣久米郡稻岡南村	誕 生 寺
十 圓	北海道岩見澤町阿彌陀中	今 金四郎
一圓二十錢	秋田縣北秋田郡落合村	根本 富貴
一圓二十錢	板橋區板橋町三ノ四三二	小松たみ子
十 圓	麴町區平河町二ノ一七	高橋門兵衛
一圓二十四錢	奈良縣高市郡高市村	水谷 良文
二圓四十錢	大阪府天王寺區上汐町二ノ四六	川 崎 貞子

初めは眞如堂の如く十月六日から十五日まで十日十夜行つたが、近世になつてからは十月十二日の初夜から十五日の晨朝までの三日三夜に變更された。今でも鎌倉の十夜といふと、日蓮上人の御會式と好一對の關東の秋における佛教行事であるが、交通不便の時代にあつても、川柳に「お十夜はあんじるほどの旅でなし」と云つてゐるやうに江戸からわざ／＼參詣に行く者が群をなしたものである。

今日では、何れの寺に於ける十夜も、夜でなく晝行はれるものが多いが、最近までは夜を徹して鉦の音を聞き、説教を聞きつつ、長い時間を楽しく過したもので、昔は相當にこの十夜法要が月下氷人をなしたものの如く、「我が戀は婆になりたる十夜かな」とあるものなど、その間の消息を語るものであり、又この十夜が種々な良い機會と然らざる機會とを與へたことは、前に掲げた十首中にも見られ、それを讀んだものは「一々枚擧に違がない。又新嫁が姑の寺詣でに依る不在を樂しむために、姑に十夜參りを勸奨する有様を述べたものなども少からずある。」「そうばんがなりやすと嫁舌を出し」などは、露骨に下品にその間の消息を傳ふるものである。

このやうに民衆生活と非常に親しまれたお十夜の起原や、關東進出の動機は、右の次第であるが、更に遡つて、十日十夜の間の佛會を行ふ起原を尋ねると、無量壽經卷下に「此に於て書を修すること十日十夜すれば、他方諸佛の國中に於て書をなすこと千歳

なるに勝る」と云ひ、阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經に、若し人、阿彌陀佛の名號を稱ふること十日十夜したならば、十日の中には必ず阿彌陀佛を見たてまつり、十方世界の如來及びその淨土を見ると出来る」と述べてゐる。

眞如堂の十夜は、前後二回にわたる貞國の參籠日數を合せると十日十夜となるに起つたものではあるが、更にこの十日十夜に深甚の意義を求めたものが、無量壽經や、阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經の思想である。

お十夜に參籠してゐる人達に、寺々では、夜半に及ぶと、一椀の雑炊を供養してゐる。初めは夜半の空腹を充たし、寒夜をしのぐために食せしめたものが、後になると、この雑炊を食べると疫病に罹らぬとか色々な説明が加へらるるようになった。地方によると、この雑炊をお十夜様と稱へてゐるが、この方言が更に轉じて「おじや」となり、雑炊の代名詞となつた。雑炊は、古くから行はれたもので、野菜をきざみこんで煮た粥であるが、室町時代の語彙集である下學集には増水と書いてある。雑炊、増水、何れもよくその本質を示してゐる。雑炊は、河内、播磨では「びやうたれ」、加賀、越中、但馬では「みそづ」、越前では「にめし」伊勢では「いれめし」、東國では「おじや」と呼ばれ、地方々々で異つてゐるが、「おじや」の語原が「お十夜」から出てゐるなど、なかなか興味がある。

法然佛教とわが國體思想

文學博士 山本幹著

近時國體と宗教との關係がやかましく論議され、特に國民生活に深くにじみ込んで居る佛教が果してわが國體に合致するか何うかと云ふことが、佛教徒全體の關心となつて居る。それ故各宗に於いても「皇道佛教」なる新題目が研究され提唱されて居るが、いまだ以て凡てを首肯せしめ得る程の論は成立して居ないやうである。

餘り廣く讀んで居ないから、或は獨斷を免れないかも知れないが、大體に於いて護國教的立場をとるか、會通的立場をとるかして居るやうである。然しそれぐらゐでは佛教存立の根據にはならない。何故ならば神道に於いてはもう永いあいだ今までに佛教思想を取り入れたのであつて、もう取り入るべきものは取り入れてしまつたから、今更に會通的な思想は要らないのであり、現在の神道理論でも充分だとして居るらしいからである。だからわが國體と一致してしかも神道理論を一層高次に助成し更に進展せしめ行くものでなければ、我々は茲に尙ほ佛教

理念を要求する義務を有しないと思はれても仕方がないのである。また護國教的立場では別段邪魔にはならぬかも知れないが、それだからと云つて之を國民に信奉せしむる程の必要性は感ぜず、神道一本の方がむしろ國民統制上にはよい譯であるから、結局そんな佛教などはなくとも敢へて差支へないことにもなる。此の故に佛教存立の理由はもつと根本的な根據の上に立つものでなくてはならない。

山本博士の近著「法然佛教とわが國體思想」はその序文に「過去の文教史的展開を餘すところなく包み生かして、しかも獨創的觀點の下に、わが國體思想の實相を全からしめる。他國の精神的基底にまでも相通じて、しかもわが國ならではのと思はしめる新宗を開創する。これが法然佛教の偉觀であり、皇紀二十七世紀の勞頭にも、なほこれを反省すべきゆゑんである」と云つて居るやうに、我が光輝ある國體思想の實相を全からしむるところの高度の淨土觀、即ち理想國家觀の上に立つものであると同時に、他國もまた

取つて以てこれを龜鑑としそれに隨順することに依つて自らも榮え且つ全體の和平和樂を得るところの根本的恒久的理念こそは、聖德太子以來顯現さるべくして果さず、七百年の長年月を経て、始めて法然佛教として我が國に開顯したものであり、そしてそれは單に一教一宗の教學ではなくして、日本教學として新しく再認識さるべきものであることを、周到な學者的立場及び著者自らの深い信仰實踐者としての意志からも我々に肉迫し來たる筆致を以て、堂々と論及されて居るところの近來の好著である。

私はその一本を手にするや否や、最後まで一氣に讀したのであり、且つ讀したるまで巻を覆ふことの出来なかつた程、感銘深く讀んだのである。

私は敢てこれを大方におすゝめしたい。少くとも佛教と國體との關係を顧慮する方々は是非共速かに一本を得て胸の曇と頭の中の混雜とを一掃し、その欲求に満足と與へられんことを切望するものである。(中村辨康)



秋 日 夜

吉田 絃二郎

けふは朝から浅間もめづらしく姿をあらはしてゐる。昨日は久し振りで爆發してものすごく眞つ黒な煙を吐き、石を飛ばしてゐたが登山者が二人行方不明になつたといふことである。その悲劇などは夢想もされないほど今朝の山は静かである。

今朝は赤松山の上に千ヶ瀧が白い絲のやうに懸かつてゐるの見える。いつか千ヶ瀧の瀧壺のあたりで仔熊に出會つて逃げて來たといふ人の話などを思ひ出す。

わたくしの窓から浅間の大觀を一眸の裡に容れることが出来るので、夜が明けるから日が暮れるまで浅間を眺めてゐることが多い。浅間の東寄りの斜面には數年前雪崩のために七人の登山家の生命を奪つ

た跡がある。柔らかな草が繁つて、いつも白い雲がそのあたりに漂うてゐる。その七人の中には姉と妹二人の女性も交つてゐた。その二人の女の子を失つた老父母は浅間まで訪ねて來た。母は峰の茶屋まで登り、父だけが雪崩の場所までたどりついて悲しい娘たちの跡を弔ふたといふことを聞いた。浅間の柔らかな山肌や、草の上に徂來する白い雲をながめてゐると、今も尙ほ浅間の徑をたどる老夫婦の旅人が、雪崩の跡に佇んでゐるやうな氣さへする。山はすでに秋に入つた。空は海よりも青く、雲は雪よりも白い。

浅間に對座して寫經をしてゐると、つい縁の先五



六尺のところ母と子の雉子が来てしきりに草の中をあさつてゐる。

雉子の雛を呼ぶ聲、雛の母を呼ぶ聲はきはめて低く、草の下にこもつてゐるが、秋風よりも寂しく人の胸にひびく。

雉子の子はをり／＼草の中から頭をもたげてはものめづらしげに寫經してゐるわたくしを見る。

時としてわたくしは散歩をしてゐる時など母と子の雉子を見ることがある。突然人の姿に驚かされた雉子は母と子と、別れ別れに逃げることもある。母鳥は子を案じてしきりに呼ぶ。しかし子はなか／＼母の傍へ行かぬそのやうな折、母鳥の頭上をかすめて大膽にも子の傍に飛んでゆく。子を愛しむ雉子の親心には胸を打たれるものがある。

わたくしはかつて天城を歩いてゐて雛を奪はれた鵲鴒が訴ふるがごとく鳴きつゝ鷹の後を追うて行くのを見て暗然たらざるを得なかつたことがある。近江の坂本から叡山に登る山徑でも同じやうに鷹の後を追うてゆく小鳥を見た。

わたくしは信濃の山に來ても同じ山の殘虐な暴君

たちについて聞いた。このあたりの最も慘酷な鳥といへば、鳶である。鳶は一撃の下に雉子を屠り、肉は元より骨までも貪り盡すといふことである。靜かな山の生活にもあさましい自然界の姿を見なければならぬ。

×

山の生活にをれば一切の生活上の觀點が移されて來るのか、無爲にして生きる生活の尊さが身に沁みて感じられる。本を讀むこともせず、仕事もせず、終日山に對して坐し、黙々として山を眺め、雲を観る生活に浸されてゐる。

朝は雉子鳩の聲に眼をさまし、あたりの山を歩いては落葉松の枯れ枝を拾ふて飯を炊き、茶を點じ、經を寫し夜とともに寝る。家の周囲には一本の杭も樹てず、一尺の籠をも備へない。家をめぐりて咲く秋草のつゞくかぎり、山の横たうかぎり、雲の湧くかぎりわが家であり、わが世界である。

都會の生活では門前に人の聲音を聴くたびに胸を突かれる思ひをしなければならぬ。山の生活では訪客はむしろ歡迎さるゝ。たま／＼霧をへだてゝ近づ



き来る訪客を見出す時、思はず走り寄つて客を案内するやうな心にもなる。

子を失つて悲しみに囚へられてゐる訪客とは未來について、死の世界について語ることもある。炭を焼く老人からは四十餘年前には、浅間の麓にも鹿の群が棲んでゐたことや、鹿を撃つて鹿を擔いで村に歸つて來たことや、このころ狐が殖えたために山鬼がすくなくなつたことなどの話を聞く。また或る青年からは山の鳥が悪戯者で、小鳥の巢を襲つては卵を啄いてしまふことや、啄木鳥が門の柱に巢喰ふた虫を啄いたために門が傾いたといふやうな山らしい話を聞く。

人は來りて山を語り、鳥を語り、やがて一碗の茶を喫して去る。恰かもそれは風の來り、風の去るがごとく自然である。客の去つた後わたくしはふたゝび經を寫す。いつの間にか縁にちかく秋草の中に雉子の子と母は呼びかはしつゝ餌をあさつてゐる。鶯に啄かれないやうにして大きくなれゝわたくしは雉子の聲を聴きつゝかく思ふ。

靜かな午後、山は曇り、落葉松の葉は落ちてゆく。

久し振りで東京に歸つて來た。

武藏野の家の周囲には山よりも虫の音が多い。山の虫の音はいかにも寒々と聞えてゐた。その種類も少なかつた。武藏野の虫の音は一つ／＼の音が性格を持ち、自我を主張してゐるやうにひゞく。雲を吸つてゐる山の生活と、他を押し除けて生きねばならぬ都會人の生活の相とも見られる。

昨夜は月も澄んでゐた。庭に下りて虫を聴いたり星をながめたりした。轉虫、邯鄲、草雲雀、こぼろぎ、馬追ひ、それぞれになつかしい昔を思ひ出させる。

たゞ鈴虫と松虫の音が聞かれないのがさびしい。

庭には萩も咲き、鶏頭も咲き、朝毎に芙蓉も咲きはじめた。山から下りて來て眞つ先に芙蓉を折り佛に供へることにした。

家に歸つて來ても疲れてゐるのか、午後には午睡を樂しんでゐるが、午睡から覺めた縁先にちかく咲いてゐる芙蓉をたゞ一輪手折つて佛前に供へにゆくのが日課のやうになつてしまつた。

武藏野の家居に獨居して秋の空を眺めてゐれば、こゝにもありがたい生活はある。



商船學校と淨土

廣島文理科大學教授
文學博士

山本幹夫

廣島から下り山陽線の柳井廻りで約一時間
半、海のよい眺めにそれ位の時間の經つのを
忘れてゐると大島といふ驛に着く。名前は大
島であるが、われわれの眼につくのは島では
なくて海である。それもそのはずであらう。

大島といへば、廣島あたりからも釣りに
出かける所なのである。いな、廣島
どころではない。上方からでも魚釣り
にかなり來るらしい。だから大島とい
ふ名前はとおよそ反對に魚釣り、舟遊
びを聯想させる所のやうである。さう
して素人が尺餘の鯛や茅などを魚籃に入れて
歸路についてゐるのに車中でも出くはすと、
もうその顔を見ただけでわかるほどの嬉しさ
である。

しかしかういふ光景は少し時節向きでない
かもしれない。尤も動中静あり、忙中の閑と
いふことはあるが、それはそれとして、船と

いへば釣舟でなしに船艦を思ひ、さうして靜
養といふことよりは修鍊といふことを考へる
時勢であることには、誰しも一致してゐるこ
とである。いな、それどころではない。臨戰
態勢はますます強化さるべきであり、しかも
これが當局者から指導されるのを待つやうな
なまぬるさであつてはならない。どこまでも
下から盛り上る迫力が充ち満ちてゐなければ
ならないのである。

尤も釣舟を全廢せよといふのではない。靜
養の閑事を無視するのではない。萬事に御奉
公といふ確固たる信念と靈寶の實踐が貫かれ
てゐることが大切であり、そのうへでならば

「小屈大傳」も可であらう。大國民として大きく伸びることを忘れてはならない。

二

何も釣りのことなどいふために私は大島驛のことを説明してゐるのではない。目的はそこから渡船で大島のはうへ行くことをいひたいのである。といふのはこの一文を「商船學校と淨土」といふ題にしたのも、その商船學校とは實は大島商船學校のことであり、さうしてそこでは全校學つて念佛修鍊が行はれ、まさに學校淨土が實現されようとしてゐるのである。したがつて、前に私が「船といへば釣舟でなしに船體を思ひ、靜養といふことよりは修鍊といふことを考へる時勢である」といつたその時勢のことを話題にしてゐるわけなのである。この商船學校は商船士官の養成所でもあり、さうしてこの時勢に先んじて一校を淨土の一翼として實現することは、やがてわが國土を淨めて翼賛の實を全うする先驅にはかならないからである。山口縣下のこの

一異彩は識者の認識を期待してよいであらう。

大島驛から渡船で二、三十分位で大島の小松棧橋に着くが、その棧橋からもうすぐそばの左のはうに商船學校は見えてゐる。今、右のはうに新築されつつあるが、これに移るのは少し後のことであらう。元來この島は大島といはれるほど實際に大きく一郡をなしてをり、またこれを終日一周すると實に天下その類の稀な絶景をほしきままにすることができ。未だ周くは知られてゐないが、筆者はすでに五年以前にこの島に巡視したときそのことを痛感したのであるが、幸か不幸か遊覽船のごときものが無いので誰も口にせず今日にいたつてゐる。また時節向きでもない遊覽などに言及したが、それは五年も前の感想であり、ここにこれから述べようとするのは、そのやうな昔話でなしに、現にこの八月下旬のことであつて、また遊覽船のごときとおよそ反對の商船士官訓練に關してである。

大島商船學校は一昨年縣立から官立になつ

僕の發見！

菩薩さまがある

高田市 稻荷 弘信

いゝ風が吹いて來た。もう秋だなあ。黄色い稻が頭をあげたりさげたりして、コツクリコツクリしてゐる。

お米の中にボサツさまがゐて、粗末にすればシク／＼泣くし、大事にすればマンママンマと喜ばれると、お母さんが教へて下さつたが、きつと今ごろボサツさまも居ねわりしてゐるんだらう。それにしても苗の時にはどうしてをられるのだらう。——さうだ、わかつた、ボサツさまはお日さまから來るに違ひない。だつて苗の時になかつたのに、日にあつたつて、だんだんお米が出来るのだから……

と云つてもお日さまだけでは穂はでない。すると雨も、ボサツ様のお仲間かな。しかしいくらなんでも、お百姓さんが種

て時局的意義を高め、海軍大佐佐藤敬三校長先生を迎へて校風一新、名實ともに飛躍の進展をなしたのである。私の見解では名實ともに飛躍の進展においてこそいはゆる新體制の眞意もあるやうに考へるのであるから、それは商船學校の新體制ともいへるであらう。舊體制を革新して飛躍の進展を完遂せしめるには、一國としても一校としても、いな國民各自がそれぞれの職分において表裏のない迫力のある實踐をもつて翼賛を全うしてゆかなければならない。ただ行事本位に考へるなどのもつてのほかであり、從來の規定でも大に活用すべきであり、命ぜられたことだけをして事足れりと思つてはならない。しかも國民各自はわが爲すべきを爲し、爲すべからざるを爲さないのみか、進んで誰一人として爲すべきを爲さない者なく、また爲すべからざるを爲す者なきやうに、力を協せ、心を一にしてゆくべきである。かくしてはじめて國土も淨まつてゆき、新體制の精神も具體化するのがある。なぜかといふと、ただ識者だけが皇國

臣民として爲すべきを爲し、爲すべからざるを爲さないことを力説するのみでは、一向に國土は淨まらない。識者とても國民の一人であり、その力説も身をもつて示しながら國民一人もれなく各自の翼賛の分を全うせしめずには置かない熱意と實踐とを俟つて、その翼賛の火焰が全國民に點ぜられてこそ、國土が淨まり、したがつて淨土といへることになるわけであらう。しかしその淨土の實を示すのは、當局そのものがその意味で淨土の一翼ともなり、一校も一家もやはりわれ先にと淨土の一翼とならなければならぬ。今私はその意味の淨土の一翼を大島商船學校に見出すのである。

三

渡船が小松の棧橋に着いて私が下船すると、そこに大島の屋代村の西蓮寺住職藤本淨上人が佐藤大佐とともに迎へに來てゐられた。この八月十九日夕刻のことである。藤本上人は私が未だ高校生徒時代のとき、もう

子をまき、草を取り、稻を刈り、育てゝやらなくてはお米は出来ない。お百姓さんもボサツさまのお仲間なのかも知れないな。すると、お米にはお日さまも、雨も、お百姓さんも、みんな少しづつ住んでゐるんだね。さうして、それらをみんなくるめて、ボサツさまと云ふのにちがひ無いや。だから、お米を粗末にしたつて、盲にもならないし、牛にもならなかつたけれど、そのかはり音も立てないで、ボサツさまが獨りシクシク悲しまれるに違ひない。さうだ、ボサツさまが泣かれると僕たちだつて、その内に盲になるかも知れないし、牛になるかも知れないな。

有難いな、一つの米粒、大切にしよう。

○

こう考へてみると、すべてのものは、何から何にまでボサツさまでをられるに違ひない。毎日、毎日大事に大事にしてあげよう。ほんとにボサツさまは有難い。大事にしないと恩知らずになつてしまふよ。

丁度二十年の昔になるが、人生の意義に疑惑を深め、大悟できなければ死あるのみの覺悟までして法を求めたのにたいして解決を與へられた修鍊の恩師であり、今日はその道場へ講師として迎へられるのはまた一人の感激なきを得ない。佐藤大佐とははじめてお會ひしたのであるが、八月二十日から五日間の西蓮寺での念佛修鍊會には大島商船學校の教官の大部分が一般有志とともに參會せられる關係もあり、はじめての拜肩とも思はれぬなつかしさを感じた。

そこから西蓮寺までは約一里、途中からはやや上り途になつて寺は山の中腹にある。夕陽を背にうけて行く道すがら思ひ出づる二十年来の回憶は、自分の更生の半生だけにまた格別のものがある。清流も山野も昔ながらのものと思へば、嘗ては生を否定せんとして入山した若人を、今は生を肯定し、いな顯揚せんとする導師として迎へてくれるやうにさへ感ぜられる。念佛修鍊によつて漸く立ち直つて、その後懸命の研學のもとに分相應の翼賛

生活のできたことを考へて、もしもその昔、生を否定するに終つてゐたならば、その生命の切斷こそ實にもつたいない極みであり、君・親にたいして申しわけないことである。

さうしてこの人生五十年の生命の根源であり、その生活の光明の淵源でもある無量壽・無量光のみほとけに相すまないことである。現今特に物資の節約といはれるが、それ以上に生命の節約こそ遙か重大なことであらう。生命が生きがへるることによつて生活そのものが生きがへり、もつて身體とともに物資のすべてが活用されてくる。そこに大生命・大光明に徹して、もつて君國に報すべきゆゑを辨へ、自分相應に國土莊嚴を果すことの使命が反省されてくる。國民一人の生命も、假りに十の働きのできるものが二、三や四、五にとどまつてゐてはならない。皆が各自相應にその十の働きを完遂してゆかなければならぬのである。かくなれば、きつと日本の國力はまだまだ現今の何倍も出てくるに相違ないであらう。

かやうに考へながら山路を辿つたとき、すでに私は西蓮寺の山門に立つてゐた。昔ながらの山門ではあるが、昔には自分の生がされることのために訪れたのであるが、今は自・他ともどもに翼賛の分を全うし、もつて國土莊嚴の一翼たるの修鍊のためである。さうしてかうした熱意と實踐とが國民にもれなく徹して、この重大時局をして皇國の飛躍の進展の勝縁たらしめずには置かれなと念ずるのみである。

四

二十日の早朝からは毎日、強烈な護國の信念録成のために、したがつてただ頭のなかで考へ出したやうな机上論の詮議でなしにわれわれの一言一行翼賛の面目ならざるはない實踐の底力獲得のために、打ち續ける木魚の音に合せて「ナムアマミダ佛」の稱名念佛の一行が實修され、その木魚の絶え間には現代日本佛教の粹、辨榮聖者の「如來光明禮拜儀」が高唱され、さらに午前、午後、夜分の三回に

わたつて連日、他宗と異り日本ではじめて開宗された法然上人の淨土宗の稱名念佛だけあつて、いかにわが國體にふさはしい萬民翼賛の教法であるかを總説するとともに、その稱名念佛の淨土が決して單なる教法にとどまらずに、わが國民誰一人もれなく直參出来る。いな直參すべき實相でもあるとして、東洋思想を日本化して開創された淨土宗を進めて、東西の思想を日本化して體系づけられた光明主義をも私は論明したのである。

終始、一般有志に交つてこの實修に専念された佐藤校長先生はじめ、大島商船學校教官各位は、必ずやこの翼賛の宗教精神を體得されて、學校淨土の實現に先驅者の大任を全うされることであらう。すでにこの三月に、卒業期の全生徒がやはり西蓮寺で藤本上人御指導のもとに別時念佛修養を三日間遂行して、ために卒業後他には見られぬほどの實績を擧げてをり、さらにこの七月には最上級の全生徒が五日間やはり同修養を敢行して、歡喜踊躍の感想は生徒自身の物語るところであり、

その好影響は家庭生活にまでも及んで父兄も感謝するところであると聞く。今や佐藤校長先生を中心として教官各位も生徒自身も心を一にして君國に報ずるところ、すでに心底から世間の闇を一掃して絶えず大ミオヤの光明中の生活であるから、一つの學校淨土が實現することであらう。すでに大島商船學校は體育のうへでは獨特の方法のもとに無比の實績を擧げ、海上護國のうへにわれわれは大に期待するところであるが、その體育とともに智育、徳育をも一元的に強化向上せしめられてゐるのであるから、不動の信念の體得と相俟つて皇國民鍊成のこの眞實の道場は、卒業生の社會生活を通して日本を淨土とせずには置かない大業に寄與するところ少くないことであらう。

五日間の修鍊を終へて二十四日の午後、佐藤校長先生とともに私は下山して、渡船を待つ暫くの間、商船學校を案内された。まことに「強く正しく朗かに」といふ校長先生の標語は隅々までも感ぜられることである。全

國に稀なこの學校淨土。どうかこれが全國に稀ではないやうになることを念じて、すなはちわが國いたる所、いな國の内外にまで、このやうな學校淨土、家庭淨土、社會淨土が實現され、わが皇國にふさはしい國土莊嚴が望ましいと願ふ思ひの切になつたとき、はや渡船は棧橋を遠く離れて、校長先生や教官各位の御見送りのお姿は見られなくなつてゐた。

『淨土宗讀本』品切れ

分冊普及版を計畫中

本會發行「淨土宗讀本」は各方面から好評を拍し、素晴らしい賣れゆきを示してゐましたが、遂に第三版も全部品切れとなりましたので、近く同書の分冊普及版を發行すべく計畫中であります。

即ち同書の第二篇教義を改訂増補いたし、第三篇實踐には佛式結婚の一項目を設け、夫れぞれ分冊し、廉價で手軽なものとす豫定です。



病者の悩みに應へて

闘病の體驗を語る

榮久庵凡藏

とかく季候不順ですと、心がいん鬱になりやすいもので、特に病人にとつては健康者の想像もつかぬ苦惱が多いものです。只今私は片肺である體で東京府立農林學校に勤務いたし、一週二十時間教壇に立ち、その餘暇には講演原稿等を書いて時を費し従つて就寢時間も僅か五、六時間程度しかありません。登山もやれば水泳もやりません。また時には柔道もやりますが至極健全で居ります。

こういふ生活の中にある現在の私の信念について理論といふやうなことには餘りふれないで卒直に赤裸々に申上げ、そして多くの病ひに悩む方々に對して精神生活の再

建設について、何かの御參考になり得れば望外の喜びであります。

自己

天地大宇宙間を何を中心にしなければならぬかと申しますと何と云つても自分を中心に考へなければなりません。

若しも外部からの影響を待つて自分を完成しようといふ考へを抱くとしたら、それはもつてのほかのことです。いつか誰かが救つてくれるだらうといふ考へではいけないのです。自分が正しくさえあれば必ず周囲は整然と正しく自分を見守つてくれます。自分のもつ愛の波動は周囲からの愛の波動によつてま

すく強められ育てられます。云ひ換えれば自分が眼を閉ざせば天地は暗黒となり、自分が眼を開けば天地が明るくなるのです。

この天地の中心にある自分を、まづ完成させなければなりません。世の中で最も可愛いものは自分です。自分よりあの人の方が可愛いなどほうはべであつて、本心ではありません。

まづ自分から愛して行かねばなりません。自分が自分を愛するといふ事は言葉の上では成立ちません。けれど自分を愛するといふ事はとりもなほさず自分が最も完全であると自覺する事です。ですから自分が佛であるといふ自覺にたつ事が自分を愛する根本となる

のであります。

肉體は自分ではありません。自分の持つてある所持品に過ぎないのです。その肉體がくずれかゝつたといつて自分の全體がくずれる様に考へるのは愚の至りであります。世間ではよく自殺する人があります。が、自殺と云つても自分の肉體を殺してゐたに過ぎません。

病氣は自分の所有してゐる肉體の不完全な現象です。自分の所持品である肉體がこわれたのです。靴のやぶれは靴屋が修繕をしてくれます。肉體といふ物質は醫者に修繕させればそれでよろしい。然し醫者がまご／＼してなか／＼修繕をしてくれない時は、自分で修繕するより外ありません。こゝで最も注目すべき事は多くの病者は自分の心まで病氣になつてある事であります。

病氣になつた心で病氣になつた體を直す事は斷じて出きません。病氣を治そうとする心は弱々しい心ではいけません。強い／＼心、

動かない正しい信念を持つた心でなければなりません。

病氣になつた心とはバラ／＼になつたまと



まらない動きやすい心です。感情や意志で常に動いてゐる心です。

感情とか意志は環境の變化によつて變化されます。

健全なる心とは正しき不動の信念を云ふのであります。醫師が治し得ない病氣は意志でも治す事は出来ません、正しき信念によつて治すより道はありません。

正しき信念とは肉體や感情等に囚はれず、心の奥を深く／＼堀下げて静観します。そこに永遠な幽嚴なものを觀じます。むづかしい言葉で申しますならば、因果によつて存在せる自分の生命といふものを觀するのであります。この生命といふか靈といふか、それはこわれぬ滅びないもので、一時的な存在でなく、永遠の存在、完全な存在であります。これは即ち佛の存在であり、如來の存在であります。これは如何なる人にもその生命の中心本元となつてゐるのであります。この自覺が不動の信念となり、これによつて成長して行くのであります。この人とそ世の最大の勝利者であります。

この信念を體得すれば病氣であらうがなからうが、自分が滅びないのであるから問題にはならないのであります。そこに何の恐怖も

心配もありません。むしろ生きる喜びのみを感じてゐるのです。怖れ戦く心が一變して悦びに満たれます。そこに今まで経験しない神秘力と申しますか、不思議な力が次から次へと生活の中にあはれて、一層有り難く一層悦びに満たされるのであります。

私は片肺でしかその片肺さへもが不完全でありながら登山もしますし海にも泳ぎます。又生徒と柔道もしますし、二三時間の講義も何の疲労もおぼへません。悦びに満ちて生活してゐます。これはこの信念によつて生かされてゐる爲であると信じてゐます。

死

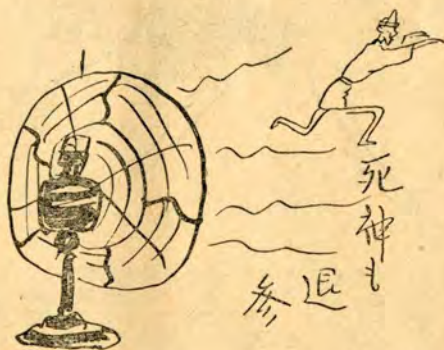
人の死には色々あります。とにかく誰もが死んで行くのであります。その中で突然死んだり死の用意なくして死んだり、何の信仰も持たないで死んだり、間違つた考へをしたまま死んだりする人は氣の毒な不幸な方であります。

人の死は肉體が滅亡するのであつて靈の滅

亡ではないのであります。自分の肉體は死にますが自分は死なないのであります。

どうして人が死を嫌ふかといふと死は非常に苦しいと思つてゐるからであります。昔から斷末魔の苦しみなどと云つて死は非常に苦しいものと思ひきつてゐますから、左程苦しくない人生に更に苦しみを添へてゐるのであります。

果して死は苦しいものでせうか、私は死が苦しいと思ふのは一種の錯覺を起したのでないかと思ふのであります。誰しも死の経験をもつてゐるものはありますが私はそれに近い経験を幾度も味つて來ました。周囲の人達から危篤だ臨終だと考へられた時は幾度もあ



りました。

又私はアメリカの病院にをりました時に、私の病床の直ぐ側で幾十人といふ病友の死にも直面いたしました。死の直前に話すその人達の言葉は純粹で眞實でありま

す。私が僧侶であるので外國の習慣として彼等病友達は、何もかも打開けてその心境を話してくれました。それらを聞かされました私は神秘的な靈感とも云ふ可きものを感じたものであります。

とにかく私の場合にしても、又他の病友の態度や言葉によつても死の直前に大いなる苦しみがあるとは何うしても考へられませんでした。私は苦痛を感じるときは生かされる時であり、癒る時であると思ひます。一度崩壊した肉が蘇生する時に苦痛を感じます。苦痛は生きる爲の現象であると思ひます。死ぬ現象ではありません。苦し

みが死に行く現象であると考へる事と苦しみが生きる爲の現象であると考へる事とは、全く正反對でありますから日常の生活に又病者にとつてどんな影響があるか詳述の要はないと思ひます。

死と苦みとは世界が違ひますから結びつけて考へる事は出来ませんが、死に苦しみがある事は如何にしても考へられませんか。

佛教では臨終について色々教へてあります。

人に特別な恨みとか執着とかない限りに於ては、臨終は静寂なものであり嚴肅なものであります。次の世界に生れかわらんとする莊嚴な準備であります。人生に與へられた最も尊い時間です。臨終は人間に與へられた最も尊い恩寵であります。私達はこの尊い恩寵を感じ謝し悦びをもつてうけなければならぬのであります。

かういふ信念をもちますと常に死の恐怖をもつてゐたものが、死に對して或る安全性を感じて生活がぐつと落着いて來ます。萎びた生活が一變して活氣を呈して來ます。

苦痛が生きる爲の現象であるといふ事について最近の私の經驗を述べてみませう。一昨年私は澤山な子供をつれて十日間臨海修養團を指導してゐました。その團員の中に十六になる女の子が居りましてボートで戯れ遊んで



ゐますうち、過つて海水へおちたのです。その子は泳げなかつたので私は體が悪いなど考へないで飛込んで助けようとした。その子は夢中で私の體にしがみつきましたからた

まりません。その子と一緒に溺れまして随分水をのみましたが、間もなく大勢に助けられ大事に至らなかつたのであります。その時の事を今でもはつきり覺へてゐますが、陸へ上つての呼吸の苦しさはとても大變でしたが溺れてゐる最中には夢中であつて何の苦痛も感ぜませんでした。その時苦痛とは生きる爲のものであるとつくづく感じました。

死は誰しも遭遇する簡單な事實です。しかも人生に於て最も嚴肅な事實です。何も怖れる事はありません。

時 間

時間は物質ではありません。時間にはものを生かすからがあります。昨日の今と今日の今と嚴密に考へますならば、その間同じ存在であるものは何一つありません。すべてのものが時間によつて生かされてゐます。病者は時間のたつ事を非常に怖れます。一時間たてば一時間だけよくなつてゐるのであります。一時間たてば一時間早く死ぬのだと怖れ

るのは時間を誤つて観てゐるのです。時間には癒やす力があります。佛教の無量壽佛とは時間的に考へられる絶対的の佛であります。この佛が宇宙に充滿して總てのものを生かしてゐられるのであります。人は病者に限らず時の流れに従順である可です。餘り急ぎ過ぎてもしけませんし、又ゆつくり過ぎるのもよくありません。病者は時のたつ事を心配してはなりません。時間には癒す力、生かす力をもつてゐますから時の流れに對して時の恩寵を感じ従順であれば、病氣はどん／＼よくなつてきます。

魂 + 肉体 =



人が肉體のみで出来てゐるものであります

愛

と全く獨立して生きて行かれるかも知れませんが人間の生命の本質は獨立して存在してゐるものではありません。我々の感覚では知る事の出来ない奥の奥に靈といひますか、魂といひますか、かりにこゝで生命靈と申しませう、この生命靈があつて我々はそれによつて生かされてゐるのであります。この生命靈は宇宙の大靈の中に因果によつて自分といふ存在になつてゐるのであります。獨立してゐるやうにみへるのは肉體だけで生命靈は自然界のあらゆるものと關係を保つてゐるのであります。親とか子とか祖先とかはこの靈のつながりが深いのであります。この生命靈のあらはれが愛であるのです。愛は宇宙の生命のあらはれでありますから愛には癒す力、生かす力があるのであります。愛の力は自分から出る愛と他から迎へる愛の結びつきによつて生れて來るのであります。愛とは(相)であり(會)でありますから二つの結びによつて生れ出るものであります。

病者は近親の人々を愛さなければなりません。愛とは育てる事、敬ふ事、感謝する事であり、近親の方々に感謝し敬ふといふ心掛でなければなりません。又病人を看護する人々も病人に感謝し病人を敬ひ育てるといふことを心掛けてゐなければなりません。

そこに正しき愛が生れ出でこの愛の結合が力となつて本當に病人が心身共に再生し得るのであります。申すまでもなく愛は慈悲心であり佛心であります。内に有する佛の自覺不動の信念が生活の中に愛としてあらはれなければなりません。

佛は天地に漲つてゐられます。この天地に漲る佛を私の中にお迎へして、お迎へした佛心が天地一切に向つて再現され、即ち天地一切の存在に愛を感じ、私達に關係する一切のものに感謝する事でなければならぬのであります。

歌壇



與謝野晶子

東京上野昌子
この文も短かし無事を告ぐるのみ
征野を思ふ銃後の妻は

評 戦地からの便りはいつも無事と云ふ短
い言葉だけである。銃後にある妻は、
それを讀んで、手紙の短いのは、忙し
いからだと思ひ、或はつかれたのでは
ないかと察する。そして一葉のはがき
に様々の思ひをはせる。

長野縣 丸山力剛
夜深く港に入りし大艦の探照燈を

よぎり雁飛ぶ
評 爽快で新味のある秋の夜景である、軍
艦の探照燈に照し出された旅雁のむね
を詠んだのは面白い。

東京押野尙秀
月給日百に足らはぬ金をもていそ
いそ歸る妻と兒のもと

評 質實な楽しい家庭の有様が眼に見える
やうで讀者の心を明るくする。

北海道 中村もん
國力をうたがはぬかも大いなる歴
史のなかにつつしみて住む

東京栗山みさを
青年飛行將校を子に持ちて

今日もまた大空翔ける吾子なれば
つつがなかれとわが祈るかな

栃木大輪云海
空澄みて栗の穂風の匂ふなり山の
麓の家にしあれば

京都嵯峨山千高
颯風の第五陣來る報せありことな
かれかし瑞穂の幸に

東京八木美根子
きびしかる生活思へば女われも務
重しと身内張るかな

長野縣 宮澤榮子
一度は國に捧げし命なり生き永ら
へてまたも出で征く

北海道 前野賢一
この深夜病室を踏む看護婦のあつ
き情に涙ながしぬ

京都望月久次郎
簾こす光うごきて今朝秋の風にあ
ふるるこの家この軒

北海道 清水保子
ほのぼのと戀しりそめてなつかし
き君の名を呼ぶところひそかに

青森縣 平岡一室
親のなき子をば哀れと思ひけん馬
ともなりぬ病みたる我れが

北海道 花田順往
三寶のめぐみあまねき世にあひて
日日新らしくわれは生きゆく

長野縣 宮澤圭子
明日もまた雨とやならんひねもす
を麥刈り暗き夕べとなりぬ

兵庫縣 荻野晴雪
ひしひしと身に迫り來るものあり
て驛の廣場に兵士を送る

滋賀縣 美松横苗子
開くとき音のするてふ蓮の花きか
むと耳を澄すあかつき

京都 齋藤耕善
友征きて二年めぐるこの秋にかの
園荒れて済まぬ心地す

東京藤林貞子
母にしてさとの心の樂しけれのび
ゆく吾子の姿みつめて

静岡縣 一向山人
つはものは勝たざるべからずと神
前に肩つりあげて誓ひたてたり

北海道 寺田頑山
彌陀佛の五劫思惟もみいくさもす
べてわれ等が爲にこそすれ

青森縣 丸尾傳山
山の幸海の幸をも祈りけり村人と
もにまごころこめて

勤勞奉仕
一日に焼けたりと云ふ友の顔は尊
き汗に輝きにけり

茨城縣 眞木謙太郎
何處にか笛の音してこの夕かへら
ぬ友を思ひ出でにき

東京 船津定祐
久々に見舞へる友は生活の日ごと
につのるきびしさを告ぐ

大阪 廣眞
生れたる其の日に近ける幼兒の庭
にぞ咲ける朝顔の花

東京 三輪幸節
青葉匂ひ河の流れの音はげし浴衣
のさむき山里の夜

投稿規定

はがきに一回二首以内とし
「淨土」編輯部歌壇係あて
に送ること

或る病兵の手紙

編輯部

— 紙 手 の 兵 病 る 或 —

白衣の勇士酒井廣美氏が病勢充進のため絶望と知り苦惱したが、本誌を手にし、中村辨康師の指導を受けて豁然として悟るところがあり唱名の生活に入つた。そして或ひは肉體上の苦痛と闘ひ、或ひはむらがり來る雜念とたたかつて一意精進を續けた。その結果何うやら彼自身でこれならと思ふところまでに達した。しかし一度、一枚起請文の精神にふれるや、彼は思ひきり竹刀でたゝかれた思ひであつた。入信だ心況だと云ふのも要するに口ばかりバクバクさせるに過ぎないのを知つた。そこで彼は一切のものに絶縁して、と

に角一週間の間、絶對念佛の生活に入るべく決意し、何物かを得ずば止まずの氣魄をもつて、一本道に突進することになつた。(前號までのあらすぢ)

第七信

前文御免下さいませ。昨日からまたまた熱が三十九度六分になつて、頭の上下を冷してゐますので寝たまゝ書きます。どうぞお許し下さい。

何もかもすてゝ一週間、必ず何ものかを得ずば止まない決心をいたし、前便で、その覺悟をお傳へいたしました。七日の間は面會も避け、書物も讀まざり一人になつて

お念佛を唱へようと決心しました。これが一枚起請文を拜讀して頭から打ちのめされて再び起つた決心でした。

も如來さまが私をなぐさめつゝ寝汗をふいて下さいました。如來さまは私の云ふことを、どんなことでも聞いて下さいませ。

そして一週間の自分獨りだけの別時念佛が過ぎてから何かをお知らせしようと思ひましたが、鈴木良和さんから先生のお言葉を傳へきゝ、ついその懐しさにまけて、取りあへず入信の事實だけをお知らせしたいと思ひます。

六月三日
中村辨康先生

酒井 廣美

第八信

先生、随分ご心配をかけましたが、お喜び下さい。第三日目の六月一日夜のこと入信の自覺を得ました。大自然のお慈悲に泣きました。すべての恵みが如來さまのお慈悲であるとわかりました。昨夜

(酒井氏の書簡の中で、この第八信が最も重要な意味を持つてゐました。可成の長文で七日間の別時念佛の感想が一々詳細に記されて

みました。

ところが何うしたわけか、この一書だけが中村師の手箱の中から失せてゐました。同師にお願して書齋のあちこちを探していただきましたが、結局見當りませんでした。従つて残念ながらこの一書だ

けを缺くことゝいたします。

しかし中村師の御記憶によると何んでも一週間の内の初めの三日間は可成り徹底した法悦のやうな生活が続いたやうです。例へば酒井氏が如來様と直接談り合つたことが幾々記されてあつたやうで

す。しかるに六日目あたりからその獨り合點の法悦も漸く醒めかけ

七日目にはスツカリ馬鹿らしくなつたと申します。酒井氏の申す如來様があまりに自己的に考へられたもので、結局「これは本ものではない」と云ふのでありました。そこで更に念佛の

した。それこそ文字通りの「日暮れて道遠し」の感慨が切なるものがあつたやうです。

以上第八信の大意が中村師の記憶にありましたので、次の手紙への續きには少しも差つかへがないかと思ひます。

第九信

前文御免下さい。大變失禮ですが、静臥のまゝ書きました。亂筆お許し下さい。

先生、情ないものです。十日餘りを絶對安静にしてゐましたら、めまいがして手紙一つ容易に書けません。耳は遠い。齒がぬける。身體の自由がきかぬ。

しかし私はおかげさまに「生かされてゐるのだなあ」と云ふことが感ぜられます。



その後また色々御心配をかけまし
たが、五六日前から何うやら熱が
下りました。どうぞ御安心下さい。

ただし依然として呼吸は困難ですが、これは止むを得ぬでせう。このやうなことも、耳が遠いのがいづか苦にならぬやうになるのと同じことで、永く続く内には苦しいのが當り前のことになります。

昨日鈴木さんが先生からの色紙
を持つて来て枕元にかけて下さい
ました。またいつも長いお手紙を
下さい。御親切なご指導を頂き誠
にお禮の言葉があります。有難
う御座ります。先生の貴重な時間
を割いて頂くのはすみませんが、
何うぞ今暫くお願い申し上げます。

先便では自棄的な氣持から何もかも投出してしまひ、私の勝手氣まゝに先生のお氣持を悪くしたか

い
も知れませんが、何卒お許し下さ

聖人がどうの、賢者がどうのと
ほんとにお恥しい言葉をはきまし
て、小兒のやうな無智さかげんを
宣傳いたし誠に申し譯
んでした。しかし今では自分な
ら自分の痴者さがはつきり分つて
來ました。そしてこの私如き無智
のものをあくまでもお捨てになり
ません如來さまのご恩寵には心の
奥底から感激いたしてゐます。
ふいに發熱したことも、また個
室に移されて療養してゐるのも要
するに私がかく油斷をし勝ちで
あるのに對して注意をして下さつ
たのに違ひありません。そして只
今この室で私一人で靜かに念佛
を申し三昧の生活に入り得られま
すのもたしかに恩寵なのです。
いろいろな施設や御親切によつ

て毎日何も心配なく暮らせていた
だき、看護婦さんから醫師までが
晝となく夜となく傍にゐて行きと
どいた治療をしていただけるのは
いかに金持ちの人であつても及ば
ない程ですし、更にまた私如きも
に先生との御縁が生れたやうな
ことは、何うしてもこの上もない
恩寵なくしてはあり得ないことで
す。ほんとに幾重にも有難く感謝
してゐます。

鈴木さんも御親切です。先日先生のお手紙についている／＼鈴木さんが説明してくれましたので、ほんとうによく判りました。大宇宙の大きな力が一大旋風となり、ごう／＼と卷上つてゆく音が聞えます。そして他方には、静かな、静かと云ふより云ひ現しようなない静かな、ほんとに静かな世界が目に見えます。早くけ

ちくさい自分などがなくなつて、
自分が早く如來さまと一體となり
たいものだと思ひました。

しかし私如き凡夫の力では、自我を捨て去る等といふことは絶対に出来得ぬことでせう。だから是非とも念佛を申す力によつて如來さまに引きよせていただき、自我がすつかりなくなつた時、そこに永遠不死の自己を見出せるのではないか、若しさうなれたら何んにか心強いことかと存じます。前に申しましたやうに先日自棄的な氣持から總てを投出してしまひました。しかし如何に投出したつもりでも死の恐怖だけは捨て去るわけにゆかず、何うにもならぬ氣持でした。そこで實は一案を考へ出して、先生に私の戒名を書いていただき、それを朝夕に拜した、きつと死の修練にならうか

と思つて實家の方に木牌を先生の
方に送つてくれるやう手紙を出し
ておきました。先生の方に未だ木
牌がとどいてゐませんでせうか。

只今は先生から頂戴した色紙を
座右に置いて修養の資といたして
ゐますので、位牌の方は、何うで
も宜しいやうなものです。若し
先生のお手もとに着いてゐまし
ら、私に戒名を下され、それに書
いて送つていたゞきたいと思ひま
す。さうすれば私の覺悟の弛まぬ
かともなりますし、先生の御恩
を家族に遺し傳へるよい記念にも
なりませう。

先生には唯お禮を申し上げるだ
けで、いつも勝手なことばかりお
願ひいたしますが何分宜しくお願
ひ申し上げます。

しかし先生、かやうなお願ひを
申し上げたからと云つても、只今

の私は決して死ぬことばかりにこ
だわつてゐるのではありません。
おかげさまで生きる喜びも感じさ

せて頂いてゐますので、こうして
ゐる間は生きてゐる希望もあるわ
けです。

一日一日を力強く生きてゆく、

自刃の 戒名を



生かされてゆく、これが人生の全
部だと存じてゐます。ほんとうに
有難く重ねてお禮を申し上げます

六月十四日
中村辨康先生

酒井 廣美
(つく)

(田村 辰三畫)

揮毫のお取次

ぜひ御利用下さい

○獨特の書體を以て著名な小
橋麟瑞氏にお願ひをして皆さ
まに御便利な揮毫のお取次を
いたします。

○書體は御希望により篆書、
隸書、楷書、行書、草書の五
體ともに應じますが、御希望
なき場合は當方にお任せ下さ
い。

○取扱ふ種目には墓碑銘(五
圓以上、碑文(三十圓以上、
門標(一圓前金に限る)、カン
バン(十圓小包郵便で取扱ふ
大きさ)、その他石版摺捺摺狀
(コロン紙)印刷用ポスター等
であります。

○詳細は御照會下さい。
○お申込は法然上人鑽仰
會揮毫取次部へ



自分（じぶん）をどうするか

西村伊作

して居るのではないか。

自然（しぜん）の一（いち）寸（すん）した動き（うごき）で、例（たと）へば指先（ゆびさき）の小（こ）さな傷（きず）から毒（どく）が入（はい）つて人間（にんげん）はもろくも死（し）んでしまふ。枕（まくら）に耳（みみ）をつけて居（ゐ）ると自分（じぶん）の脈膊（みやく）がトツトツと聞（きこ）こえる、心臓（しんぞう）が休（やす）まづ動（うご）いて居（ゐ）る。

大變（たいへん）なものだ。我（われ）我（われ）の身體（からだ）は物質（ぶつしつ）を組合（くみあ）せた機械（きかい）だけでないらしい。此（こ）の我（われ）我（われ）の身體（からだ）には操縱師（さうじようし）が乗（のり）つて居（ゐ）て運轉（うんてん）して居（ゐ）るのではないかと思（おも）ふ。

それが一分（ぶん）でも止（とど）まつたら自分（じぶん）の生命（いのち）は再び無（な）いものだ、どんな精巧（せいこう）な機械（きかい）でも何（なん）十年（ねん）も少しも止（とど）まらないと云（い）ふのはない、だから人間（にんげん）の身體（からだ）は普通（ふつう）の機械（きかい）とちがつて居（ゐ）る。生物（せいぶつ）は運轉手（うんてんしゅ）によつて操縱（さうじよう）されないで複雑（ふくさん）な運動（うんどう）をする。人間（にんげん）は、感（かん）じたり考（かんが）へたりする己（おのれ）と云（い）ふものを自覺（じかく）する。自然（しぜん）物（ぶつ）や機械（きかい）のどの一（ひと）つをとつて見（み）ても、生物（せいぶつ）だけの働き（はたら）きはない、生物（せいぶつ）のうちでも人間（にんげん）の身體（からだ）と精神（せいしん）との働き（はたら）きは

自分（じぶん）は小（こ）さい脆（もろ）い機械（きかい）に過（す）ぎないと思（おも）ふこともあるし、また或（ある）時は自分（じぶん）は何（なん）物（ぶつ）にも代（か）へ難（がた）い貴重（きこう）な尊（たう）厳（げん）なものだとも考（かんが）へる時（とき）もある。私は幼（わか）いときから村（むら）一番（いちばん）の財産家（ざいさんか）の戸主（こしゆ）だつた、少年時代（せうねんじだい）に既（すで）に旦那様（だんなさま）と呼ば（よ）ばれて居（ゐ）た、私の家（いへ）は私（わたし）と祖母（そぼ）とだけだつた。何（なん）不自由（ふじゆう）なく、私の知（し）つて居（ゐ）るだれよりも私（わたし）はお金（かね）を多く使（つか）ひ、贅澤（ぜいさく）な暮（く）らして來（き）た。大人（おとな）になつても

死（し）なねばならぬやうなことが幼（わか）いときから老境（らうきやう）に入（はい）つた今日（こんにち）まで何（なん）度もあつた。自分（じぶん）で氣附（きづ）かないで死（し）ぬ可（べ）きところを通（とお）り抜（ぬ）けたことはもつと澤山（たくさん）あつたことと思（おも）ふ。自分（じぶん）の智慧（ちゐ）や工夫（くふう）だけでは、どうしても今日（こんにち）迄（まで）迄（まで）生（なま）きて居（ゐ）ることは出来（でき）ない、我（われ）我（われ）は自分（じぶん）の力（ちから）では此（こ）の生命（いのち）を續（つづ）けて行くことは出来（でき）なかつたのだ。自分（じぶん）の力（ちから）とか智慧（ちゐ）とか云（い）ふけれど、それは此（こ）の我（われ）我（われ）の身體（からだ）が持つて居（ゐ）るものでなくて、宇宙全體（うちゅうぜんたい）、ありとあらゆるもの、すべて

の力（ちから）の働（はたら）きによつて自分（じぶん）が考（かんが）へたり動（うご）いたり

お金（かね）のために働（はたら）くことをせず（せ）に今日（こんにち）迄（まで）迄（まで）安樂（あんらく）に我（われ）儘（まま）をして暮（く）らして來（き）た。自分（じぶん）の欲（ほ）しいものは

何でも得られ、仕たいことは何んでも出来た、世間の人人は私程仕合せな人はないだらうと思つたらしい。多くの人人を羨ましがらせた、嫉妬させたことだらうと思ふ。それに私は私の父方の一統のもつ遺傳的な性質をもつて居て、人のしないことや、人と變つたことや新しいことをするのが好きだつたので、習慣を破つても自分のよいと思ふことをしたり、西洋の生活を取り入れたので、ずいぶん目立つて見え、世俗に従ふ人からは憎らしくも見られたことと思ふ。

基督教や社會主義、それから佛教や漢學の思想など深い研究はしなくても斷片的に心に這入つて、明治末期の知識人らしい教養を得ようとした私は西洋かぶれをしながら、また日本的な考へから出ることも出来なかつた。日本を歐米のやうにしたいと思つた。機械工業を發達させることが必要だから自分は鐵工場を作る人だと、中學校の教室で雑誌帳へ工場の設計圖など描いた。それから田園都市を作りたい、デパートメントストアをやりたい、

ホテルをやりたいなど考へたりした。中學生のころ或る婦人がその許婚の行つて居る米國のエール大學のアルバムを貸してくれたのでその繪を見て、こんなゴシック建築が美しい芝生の中に建つて居て、楡の木が高く枝を伸ばして居る、そんな學校を作りたいと思つた。私が二十年前に東京で小さな學校、西洋の學校みたいだと云はれたりする變つた學校を創立したのは、その學校の寫眞帳が原因になつて居るやうに思ふ。

斯う云ふことを書いて居ることも、自分を他の人と比べて善いやうに思つて居る憎らしところ、自然に出て居るだらうと思ふ。私の境遇が自分だけを善いもののやうに考へさせる癖を作つてしまつたのかもしれない、自分が考へ出したこととでなければ、世の中の人、どんな善いことをしても、人のしてゐることは自分はしたくないと云ふ風になつた。これも私一人が作つた性格でなく、私の父も祖父もさういふ風な人柄であつたから、父祖からの因縁と云ふものが大きいものだと思ふ。

世間一般と變つたことをしたいと云ふ主義も、それを善く現すことも出来れば、また害をなすこともあるであらう。先祖や父母を辱しめないやうに深く考へ、祈りの心をもつて行動せねばならない。

自分のする事が人の手本となつて、それが此の世を善くすることになると云ふ氣持ちで居たい。おれは金持ちだ、だから斯んな立派なことが出来る、だれもおれの眞似をすることが出来ないだらうと自慢氣をもつた、名譽欲のためにするのならば、どんな善い仕事や事業をしても、それが美しいものにはならず、喜び樂しんで事をする事が出来ず、思ふ程人に敬愛されず、自分の理想が實現されず、不満とひがみの心が起つて、善事をしながら苦悶するやうになる。

私は財産の半分を費つてもよいから、公共的事業をしようと思つて學校を創立したが、初めのうちは自我を殺して、遠慮して、人人の云ふことを聞き、人に調和してやらうとして居たけれども、だんだん自分の意思を強く

し自分の人格だけを發揮しようとし、功名を自分一人が専有しようとし、初めは財を棄ててする事業と思ひ乍ら、追追財を獲得して蓄積しようと考えたるやうになつた。それは世間一般の常識としては當然のやうにも考へられるが、決して本當の善い結果にならなかつた。人人は本當に私を學校の設立者として敬慕しない、羊頭を掲げて狗肉を賣

ると云ふ風に考へたやうだ。

そんなことを無名で投書して來る人もあつた。自分を助けて仕事をしてくれる人を信頼出來なくなり、一部の人人は早く私が引退するやうにと運動するやうなこともあつた。

本當の私の缺點を指摘するとは遠慮してくれて、私の思想が現今の狀勢と合はないからと云ふ理由で私が校長をやめるやうにと勧めた。

私は結局自分の事業の全實



權を握り、自分の思ひ通りになるやうにした。しかし、それでも自分は決して満足しない、益益不満と不安が生じ終には自分のして居る事業を面倒臭くなり、今年の春、遂に學校を自分の長女に譲つてしまつた。それでも尙、自分の考へを長女が自分の思ふ通りに繼いで行かないのではないかと疑つて居る。

私の善い點を人人は認めてくれて居ることもわかつて居る。しかし、憎らしいと思つて居る人が多いこともわかつて居る。それで私は自分のすることが當然であり、普通の人が出来ない善い事をする氣持があるのに、自分の價值が本當に上がらない、どうしたらよいのであらう、どうして本當に立派な人間になれるだらうかと焦慮する。

自我の強い結果だ、自我の強いのも貴い力であると思へることも出來るが、自分の力だけを發揮しようとし、他の人人、世界全體から自分だけを切り放した自分だけ善いものにならうとすることは、如何に善事を行つても清く澄んだ心の平安を得られないのだと思ふ。自分と云ふ自覺を與へられて居ることは人間の貴いところであるが、それを世界から別に切り放さずに、宇宙と人間社會に溶け込ますことが出來ない。斯ふ云ふことを書いて居ても、やはり自分を獨立させ、孤獨な立場に

なつて、述懐しつつも、自分を辯護し、自分を善く見せかけやうとして居るのではないか。

私は子供のときから、人にいぢめられたり迫害されたり、批難されたり、蔭で悪口を云はれたり、或時は殺してやれと思はれたりした。また、水害や、地震などの災難にもあつた、金銭上の問題で恐迫されたり、欺瞞されたりして心を悩まし、そのために身體も悪くなつたりした、財産があつて不自由な生活の出来る人も、心の苦しみは却つて貧しく立ち働く人よりも多いかも知れない。さう云ふ災厄に遇ふことも私は自分をそれに依つて英雄的なことだつたと思つたり自分が善いから人が私を迫害するのだと思つたりした。之れがやはり自分一人を自分自身に自慢して居ることになつた。自分の受けた災害が自分の心を本當に善くし、災害から救はれた後で、これはすべてのもの、すべての人々のおかげであると感謝することをせず、自分一人の持つ力、自分だけ持つて居る運命が善いからだ

自慢氣な心になり、もつと自分の力を發揮せねばならぬと考へる。人はみな卑しい慾望、手近かな利益を追ひ求めて居るが自分だけは人間のもつ最も高尚な方法をもつて人に自慢してやらう、さう云ふ自慢ならば立派なものだと、どこまでも自分ひとりを押し立てようとする。それで益益心は焦り、人を輕蔑し、人は自分を羨ましがつて憎み攻めるのだと人を疑ふ。

自我を棄てて、自分の力ばかりによらず、世の中にしやばらずに、ただ南無阿彌陀佛を稱へて居れば人は苦惱より救はれる。それは正しくさうに違ひないと思ひながら、その南無阿彌陀佛のおとなへを、自分自身のためだけにして、自分の利慾の満足とするのではどうかと思ふ。

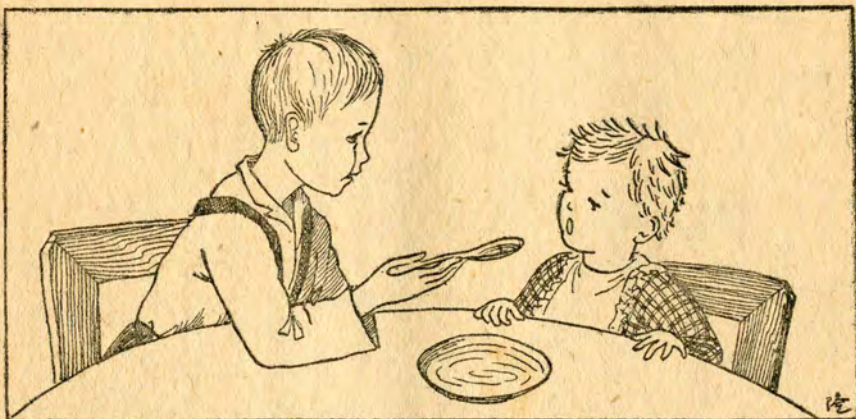
生れて來て、いろいろな緣故によつて我我はいろいろな知識を得、いろいろなことをする能力も與へられた。賢明であり、また老獪な心までもたせられて居る。それで我我は益益知慾をみがき、我我の最も不可解として

恐ろしく思ふ死の問題をも解決しようと思ふ。しかし、どうしても我我の知慾では我我の思ふやうな、自分に都合のよい満足な解決は得られないので、心の苦惱と恐怖のなやみは消えないと思ふ。

我我のもつ知識と能力と、われわれの爲す善事と徳行と世のため人のための働きは極めて小さく限られて居るが我我は誠の心をもつて全力を盡さうとして居る。しかし、我我の知慾の及ばぬ力の及ばぬ、知られざる大きな無限の世界の力に對しては理窟も努力も役に立たない。その廣大無邊に歸依するために心を空しくして、ナムアミダブツを繰返して居れば、いつかは、知らず知らずに我我の自我が萬有、無限に溶け合つて安らかな心になり、生きて居ながらにして美しい往生が出来るのであらう。私はそれを眞正に信じ得ることをまち望み、念佛を眞正に稱へる時をまつのである。

(筆者は文化學院長)

山崎善一畫



話 童
勇 敢 な ビ
ボ ー

小 林 一

皆 さ ん !

きやうだい同志はお互ひにがまんし合つて仲よくしなければいけませんね。お母さんは毎日毎日お家の仕事や元氣な七人の子供たちのお世話をするので、ほんとにお疲れになつてしまふのでした。そこで七人の仲のよい兄弟たちはお互ひ同士で世話をし合つて、少しでもお母さんのお仕事をお手伝ひすることに相談がきまりました。

中學校に通つてゐる一番年上のヨストは十六歳になりますが、彼は妹のコリーを毎日自轉車に乗せて學校に送つてやつたり、算術を教へたりすることになりました。二番目の

ルードキツヒは末つ子で四歳になる弟のコルネリユースのお世話をする役です。またいつも氣嫌がよくお歌の上手なマリイは、お人形の大すきなアンニーのお世話を引きうけました。

そしてちびれ毛のビボーには未だお世話する弟や妹があませんので、それはいづれ生れる赤ちゃんを楽しみに待つことにして、それまではお父さんやお母さんにお茶のお給仕をすることに決まりました。

さあ、このやうに相談が決まり、七人の元氣な子供たちが全部夫れゝ仕事を始めることになりましたがこう決めてからの初めての朝がきました。七人の子供たちは何んなに活

躍はなすることです。 (前號ぜんがうまでのあらまし)

にぎやかな朝食

全く愉快な朝食が始まりました。いつものな
ら、ぐずぐずとお碗わんをこね廻まわしてゐるコルネ
リユースも、ルードキツヒに喰たべさせて貰もらふ
のがとてもうれしいと見えて、匙しがまだ遠く
にある中から口くちをあけて待つてゐます。そし
て鼻はなやあごにご飯はんがついても一寸も氣にしな
いのです。

「あとでお前の顔かほをふいてあげるよ」

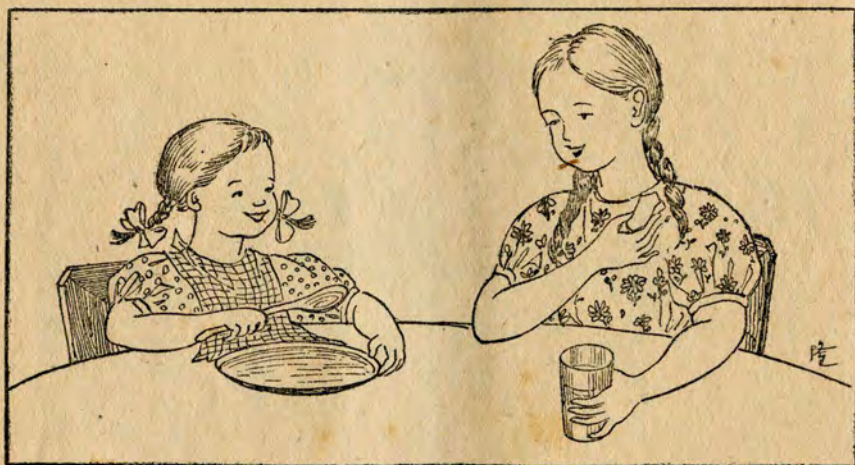
とルードキツヒがいひました。「お母さん、

あしたからはもつとうまくやりますよ。」

マリイはまたアンニーと内所ないしょで遊びごとを
やつてゐます。

「あたしが喰たべたら、あなたもたべるのよ」
と云ふのでした。「私わたしとあなたは二人いつも一
つしよなのだから、ご飯も一つしよに終おへて
しまふのよ」

で、妹いもうとは姉ねえさんと同じやうに早く喰たべて
しまおうとして、骨ほねを折やるのです。少し氣



短かなマリイでしたが、小さいアンニーが
無理むりをしてゐるのを見て、ゆつくりと喰たべ
るやうにしました。お母さんは二人のこの
遊びごとをニコニコ笑ひながら見てゐまし
た。

大きいヨストはコリーと隣り合つてすは
つてゐます。

「あたしが兄さんの自轉車じてんぐるまの後にのる時
は、きゅつと把つかまつてゐなければいけない
の？」と聞きますと、ヨストは「勿論さ、
兩手りょうてでだよ」

と答へました。

「じゃ、鞆たばはどうして持つて行くの？」

「それはね、ハンドルの前へぶらさげて行
つてやるよ。お前もうご飯は終つたのか
い？」ところがコリーはこの中で一番喰たべ
方がおそいのです。コリーは何んとも云は
ずに、まだお皿しらの上にのつてゐる大きなバ
ンのかたまりを見てゐるのです。すると、
ヨストはいきなり、それをとつて小さ
く喰たべいゝやうに切つてやるのです。

ビボーが立上りました。お母さんはびつくりして彼を見てゐます。と云ふのは理由もないのに、お膳から勝手に離れるのはいけないことだからです。

「一寸ね」と彼は甘へるやうに云つたかと思ふともう部屋の外に出てゐました。ビボーは一體どうしようと思ふのでせう。と皆んなが不思議に思つてゐるとまたすぐに部屋にもどつて来て、お母さんのそばへ行きました。手に何か持つてゐます。

「さあ！」と云つて、お母さんの目の前にきれいな鶏卵を差出しました。

「僕、日曜日までお母さんのためしまつておかうと思つただけれど、今日は良い日だから、今あげてしまひます。これは僕の鶏が昨日はじめて生んだ卵なの」

皆んなが「萬歳！」と云ひました。お母さんはビボーの頭をやさしく撫でやりました。

「これはきつとおいしにちがいないよ」

とうれしさに云ひました。

ビボーはお父さんの方を見て「二番目の卵はお父さんにあげるよ、そして順番に皆んなにね」

「ビボーの鶏、萬歳！」とルードキツヒが云ふと、皆んなが一つしよにまた「萬歳！」と叫びました。

二三ヶ月前にビボーがお父さんと散歩に出かけた折、小さな鶏を抱へて歸つて來ました。それはとても瘦せて弱々しい鳥でしたが、ビボーが毎日精出して餌をやつたおかげで、見違へるやうに立派な鶏になつてとうとう卵を生んだのでした。

お母さんがそれに二杯のお砂糖をまぜておいしさに召上つたのを見てビボーはたいへん嬉びました。

「こんでわしの分の卵が生れたら、それもお母さんに上げよう」

とお父さんが云はれました。

「僕のも！ わたしのも！ わたちのも！」と七人の聲が叫び出しました。そして七人の子供たちの目は心からいとしさうにお母さん

を見つめるのでした。

「それでは、あたし熊のやうに丈夫になつてしまふわ」とお母さんは云ひました。「日に當つて休む時間がたつぷりあつて、その上ビボーの鶏のおいしい卵を飲めるのですもの。

まるで女王様の生活ね。ほんとに皆んなはやさしい良い子ね」

お父さんが急に驚いたやうに立上りました。

「こりや大變だ。あんまり新しい出来事に夢中になつて時間に遅れてしまひさうだ」

それから、皆んなも一度にあわてだしました。ご飯はたちまち喰べてしまひ、學校の仕度もたちまち出來ました。

ビボーはお皿やお椀をお勝手に運びました。

「もういゝのかい、コリー？」

とヨストが叫びました。

「あゝ、お母さん、行つて來ます」

「お母ちゃん、行つて來ます」

「あはよ、母ちゃん」

とコルネリユースは特別な呼び方を
をして、笑ひながら出て行きます。

「窓から見て上げるわよ」

とお母さんは云ひました。子供と
一緒に出かけないなぞと云ふことは
お母さんにとつて始めての経験で
す。皆んなうまくやつてくれうまい
が。

「お兄ちゃんやお姉ちゃんが連れに
来るまで學校で待つてゐるのよ。ア
ンニーもコルネリユースも、コリー
もね」

とお母さんは念をおしました。す
るとアンニーが云ひました。

「わたし學校の先生にさう云つて、
中で待つてゐるわよ」

それでお母さんは安心しました。
子供たちは窓のそばを通る時に手を
ふつて、ニコニコ笑つて出かけまし
た。

突然表の戸がまた開いて、ビボーが駆け込



陸

んで來ました。お母さんの首に抱きついて囁
くのです。

「小さな赤ちゃんと生れたら、僕とても嬉し
いよ」

ビボーの眠れない夜

次の日から萬事お父さんの考へてゐた通り
に運びました。そりや、時には仲たがひや喧
嘩もありましたが、ほんとうは仲がよいので
すから何んのことはありません。

或る雨の降つた日なぞ、自轉車をうまく乗
りこなすヨストは、コリーを後にのせたまゝ、
左手でまんとおさへ、右手にハンドルを握
つて、うまく學校まで連れて行きました。コ
リーは大嬉びで、雨の日にもこんなに早く學
校についたのを自慢しました。

前にはよく喧嘩をしたルードキツとマリ
ーは幼稚園で待ち合せて四人そろつて家へ歸
つて來ようと約束しました。

夜寝る前にお母さんは三十分程ピアノをひ
く時間が出來ました。その時にヨストが歌を
うたふかバイオリンで伴奏します。そしてビ
ボーは？ ビボーは獨りで早く學校から飛ぶ

やうに歸つて来て、お仕事のお手傳ひをした上、自分の鶏の面倒を見て……待つてゐるのです。時々待遠しさうな眼つきをします。

お母さんはそれに氣がついておかしさうに笑ひます。ピボーが何を考へてゐるのか、お母さんはよくご存知です。

「ゆり籠の仕度は出来てゐるの？」

とある日彼はお母さんに聞きました。

「ええ。一番はじめにあなたに見せてあげるわよ、いらつしやい」

彼はお母さんについて行つて、柔かい蔽ひのかゝつた小さな寢臺を見ました。

「僕もこんな中に入つてゐたの？ そんなに小さかつたの？」

といふかし氣にたづねるのでした。

「そうよ、あなたは特別小さい赤ちやんだつたわよ」

とお母さんは笑ひました。

「ヨストもさうだつたの？」

「ええ、さうよ。ルードキツヒは大きな赤ちやんだつたわ」

それはピボーには不思議でした。何故つてヨストは大きな、力の強い男の子で、ピボーはこんな強い兄さんを持つたのを自慢にしてゐるのに、ルードキツヒは反對にやせてゐて小柄なのですから。

「ルードキツヒはもつと澤山たべるとよかつたのに。あんまり好き嫌ひが多かつたので、それがいけなかつたのよ」

とお母さんは云ひました。

「お母さんは今日とてもうれしさうですね」

とピボーが云ひました。

「ピボー氣が付かなかつた、ルードキツヒが黙つてほうれん草を喰べてゐたのを？ だからお母さんはたいへん嬉しかつたの。それは

あの子がコルネリユースのために喰べたのよ。だつてコルネリユースはなんでもルードキツヒの眞似をするでしよ。だからルードキツヒはだぶをこねられなくなつたのよ」

「さうね」

とピボーは云つて、ゆり籠の中を見ました。

丁度小さな枕のところをお日様の光りがさし

てゐました。何時そこに小さな頭がのつかるのだらう？

九月の終り頃のことでしたが、ピボーは夜中に目をさしました。家の中がなんとなく

さはがしいのです。お父さんもまだ寝ないのかしら？ でも邊りは真くらです。窓かけの隙間から夜の空と星が二ツ四ツ見えました。

上の部屋の何處かで戸があいて、靜かに何か云つてゐる聲が聞えます。と、突然、彼はさ

つき眠りかけた時分に聞きなれない聲を家の中で聞いたのを思ひ出しました。彼は靜かに

横になつてゐました。すると今度はお父さんの聲がはつきり聞えました「音をたてゝ子供達を起さないやうに」とさう云つて、階段

をのぼつて來るのでした。彼は起き上つて

「お父さん！」

とそつと呼びました。

「お父さん！」

扉が開きました。

「ピボーお前まだ起きてゐたのかい？」

「ええ、何か起つたの？ 僕今ね……」
お父さんは部屋の中へ入つて来て、扉をし
めました。

「では、一番初めにお前に話してやらうかね」
と云ひながら電燈をつけました。ビボーは
寢床の上に座りました。

「何に……」

と胸をどき／＼させな
がら訊ねました。彼は何
が起つたのかも大體感
付いてゐました。

「私たちの赤ちやんが今
生れたのだよ」

とお父さんはやさしく
云ひました。ビボーはお
父さんの幸福さうな、そ
して幾分涙ぐんでゐる眼
を見つめました。

「僕の子ね」

と云ふなり、寢床から
飛び降りて、いきなりそ
の赤ちやんのところへか
けて行きさうな形をしま
した。

「それ、妹、お父さん？」

「うむ、可愛い、小さな妹だよ。青い目と
とても柔かな金髪をしたね」

ビボーはスリッパをはきました。

「お前どうするつもりだね」

とお父さんが訊ねました。

「見に行くの」

「いや、まだ」

とお父さんは云ひましたが、ビボーがあん
まり夢中な顔つきをしてゐるので、念を押し
て見ました。

「お前ほんとに静かに出来るかい？」

「ええ」

とビボーは大きな眼でうなづきました。

「よし、おや、おいで」

と、お父さんは、もう十になつたビボーを
腕に抱えて、そつと下へつれで歩きま
した。ビボーの心臓は階段がきしむ度にどき／＼し
ました。

「お母さんは何處？」
と囁きました。



「無論、赤ちゃんと一つしよにあるよ。赤ちゃんとお母さんの寢室が並んであるのだよ。たいがい兩人とも寝てゐるだらう。静かにしてゐるのだよ！」

ビポーはうなづきました。お父さんはビポーを半ばあいてゐる扉の前におきました。室の中は薄明るくなつてゐました。ビポーはつま先立ちで中へ入つて行きました。彼の注意は全部あの揺かごに注れてゐました。あら、揺かごの、あの小さな枕の上にはとても小さな頭がのつてゐて、かけ蒲團の上には可愛い握り拳が見へるのです。それはきれいで可愛くて指とは思へない程でした。ビポーはそうと人さし指でその拳の上を撫でゝ見ました。自分の手がびつくりする程大きく見えしました。また出来るだけ用心して、その小さな頬つべたを撫でゝ見ました。

「なんて赤いんでせうね、お父さん」

と彼はさゝやきました。

「もう二三日も立てば、そんなに赤くはなくなるよ」

とお父さんも用心してそつとさゝやくのでした。

「ビポー、妹は可愛いかい？」

と云ふ別な聲が聞へました。ビポーはびつくりしてお母さんの方を見ると、お母さんがうれしうにやさしく彼の方を見てゐました。「そして僕の子でしよ、そうでしよ、お母さん？」

「さうよ、だからあなたに最初見せたのですわ、ねえ、お父さん」

とお母さんは云ひました。

「さあ、もう歸らう。あしたの朝になつたら、お前が早く皆んなにこのことを話して、家中静かにするやうにさせなければいけないよ。それがお前が赤ちゃんの爲めにしてやる第一の仕事だよ。赤ちゃんは静かに眠らなければいけないから。他の兄弟達は朝の中は赤ちゃんを見ることは出来ないよ。まあ午後の四時頃ならいゝだらう。皆なつま先で歩いてちよつとも音を立てないやうにして貰ひ度い」

「いゝですとも」とビポーは一生懸命で云ひ

ました。「僕は皆んなにちゃんと云ひきかせてやりますよ」

彼は自分に大きな責任を感じました。何故つて、皆んな寝てゐる間に自分だけがお父さんとお母さんとに赤ちゃんのことを頼まれたのですから。

「お寝みなさい」

とお母さんは彼にうなづいて見せました。

「さ、早く寝なさい」

とお父さんも云ひました。

「また上へ連れて行つて下さる？」

とビポーはお父さんに頼みました。そして来た時と同じやうにお父さんの胸にだかつてまた自分の寢床まで歸りました。

直ぐねむりましたが、彼はこんな夢を見ました。あの小さい妹が川の中へ落ちたのですが、幸ひなことに泳ぎを知つてゐた彼は水の中へ飛込んで、妹を救ひ上げ、意氣揚々とお母さんのところまで抱いて行つたのでした。(つゞく)



青森縣柏村 手 剛 一 宏

よき友を得て蠅虻とかはりけり

評 蠅に代つてむとまつた。どこへとも

何ともないがたとへばハツ手の葉の上
 上てもよい。此の有様を見た作者は此
 の表現のやうに感じたのであらう。
 面白い見方であり、其處がよいので
 ある。

今治市 三水 光子

緑蔭の思ひ／＼の石に座し

評 緑蔭にいつかの石が様々に置かれて
 ある。思ひ／＼さける爲めに、或は休息
 する爲めに、手頃と思はれる石を撰ん
 て人々が座してゐる。夏の日の一幅の
 繪を見てゐる様だ。

東京市 渡邊 一念

朝顔の花より明けて風すがし

評 一見まことに陳腐に見えるやうではあ
 るが、朝顔の覆顔を見る風の如何にも
 清々しいのと花より明けての、表
 現が棄てがたい。

東京市 三野 輪 幸 節

月見草向ひの町に灯つく

京都市 愛 登 紅 芽

夏草を分けて小祀に詣でけり

同

一堤の白く揺れけり月見草

新潟市 大輪 云海

朝顔に悔無き心うき立ちぬ

岩國市 長 岡 白 朝

桃買へと買ひたる人の勧めをり

北海道 花 田 順 往

地藏尊祭りぬ集りし子らのため

名古屋 堀 場 典 雄

病人に涼しくなれと水を打つ

北海道 眞 田 悟 空

祭ふけて幟に風の音ばかり

東京市 清水 貞 水

聖僧の奥津城寂し秋の蟬

福岡 高 柳 映 水

おもむろに霧晴れ潮の満ちあたり

山 梨 程 原 一 幸

除夜の鐘きく嬉しさのありにけり

豊後島 富 岡 程 一

月影をうつして涼し夏的大海

小樽 平 井 正 念

雑草の花見落さぬ蝶々かな

京都市 藤 岡 孝 治 郎

蛸を開けば聞くほど憂き世哉

堺市 笠 井 松 枝

行水や白粉花のこぼれ浮く

香川縣水上村 日向 法 圓

裏縁に日の當り初め秋近し

柏崎市 小 林 正 伍

晩涼や川向ふなる港の灯

玉川 五 島 資 誠

朝な朝なトマト熟るゝが榮しくて

京都市 永 田 七 郎

昨日今日たゞなんとなく秋の風

飯田市 宮 澤 榮 子

夕陽影永き寺庭に小鳥鳴く

滋賀縣 美 船 橋 笛 子

午睡の子瓜を求めてやまざりし

同 重 野 ふ み 子

此の夏を太りて行くは寺の猫

茨城縣 眞 木 謙 太 郎

汗ばめる兒の美しや蟬時雨

深川區 細 田 初 枝

ひる下り歩くひまなし蟻のみち

長崎市 池 田 春 枝

我紋に能く似し蝶を偲び見る

大阪 秋 芳

初雷に歸還の兵の續くなり

甲斐 程 原 一 幸

川上に夕立有りと濁り來ぬ

山 梨 杉 本 伊 子

墓参り日傘の中の花の束

島根石見千翠

無意識に経くりかへす棚經僧

同 神 一 倫 道

なつかしや魂棚に見る戦死の子

青森縣 丸 尾 傳 山

戦死者の供養もかねて千夜哉

島根 仁 阿 無

蚊やりたくみとりの妻の疲れ見ゆ

萩 野 宛 月 峰

暑くも有り涼しくもあり蟬の聲

名古屋 堀 場 典 雄

身病めば心弱りて秋となる

秋田市 木 村 草 吾

南風に油田ゆら／＼草となびき

滋賀縣 二 橋 定 道

きそひ飛ぶ蛙と見たり進みゆく

北海道 中 村 も ん

郊外の萩の新居に人を訪ふ

同

投稿規定

官製はがき一回二句以内と
 し「淨土」編輯部俳壇係あ
 てに送ること。

▽御投句について△

歌壇、俳壇、柳壇ともに投稿の切
 は前々月二十八日ですが、なるべ
 く早く御投句下さい。

信仰

妄念とは何のことか

(問)

法然上人法語
抄五六頁に

「妄念餘念をもかえりみず」と有之候が此の「妄念」とは何の事に御座候哉。また彌陀和贊の中にも

相談

「妄念起らばいろはずに」とあり悲心僧都横川法語にも「妄念は元より凡夫の地體なり、妄念の外に心なきなり、乃至蓮臺に乗ずる時こそ、妄念をひるがへして覺の心とはなる」と有り、此の妄念のことが分らず御尋ね申上候次第に候。

(函館・吉川・上杉生)

(答)

「妄念」とは「妄想より生ずる念ひ」と云ふことで、迷ひの心にとです。この迷ひの心は私慾を「亡び」の道に引き入れるので「妄」と云ふのです。「妄」とは「亡びる」と云ふ字と「女」と云ふ字と

の合成字です。「女」の字は昔は「妻」と同義に讀ませたさうですが、女の古文は人が兩手を垂れてかしこまり柔順の意を表して居りますし「母」の古字はそれに「子」の字を二つ加へて乳を表示して居るだけで、形は「女」の字と同じです。だから「女」は直ちに、妻をも意味し母をも意味して居ります。また「亡」は失、滅、死、逃、忘等の義があります。ですから「妄」には「亡」を産み育てる義理があるので「みだる」とか「あやまる」とか「むなしく」とか云ふ意味を持ち、引いては「うそ」「でたらめ」等の意味にも使つて居る譯です。

信仰相談

(質問歡迎)

が、佛教語では「妄想」「妄執」「妄想分別」と同義でありまして、人間の平常なる考へ、思ひ、見方等は一切「妄念」だとして居ります。だからこそ「横川法語」の「妄念は凡夫の地體なり妄念を離へしと覺の心とはなるなり」と言つて居ることも「成る程」とうなづけることでせう。大乘起信論には「一切の諸法は唯だ妄念に依りて而も差別あり。若し妄念を離るれば則ち一切境界の相なし」とありますが、これは一切の森羅萬象を森羅萬象として眺めて居るのは凡夫の妄念の然らしむるところであつて、覺めたる者より見れば無相眞如でしかないと云ふことを説明して居るのです。

今お賀ねの御法語の「妄念雜念をもかへり

擔當 中村 辨 康



みず」と云ふ「妄念」は念佛以外のことを云ふのですし「雜念」はその「妄念」が色々雑多に起つて居ることを云つたのです。凡夫の習ひとして「妄念」の起るのは、妄念の中に生活して居るのですから寧ろ當然なことでは止むを得ないのですが、何うぞして此の妄念の起らないやうに「正念」で念佛したいと思ふ餘り、更に一層「妄念」が起り勝になるものでそれを「止めたい」とばかり思ひつめると、今度はその止めたいと云ふ「妄念」で一杯になつてしまひます。

つまり「妄念」と相撲を取つて居るわけですから、それではなんにもなりません。

だからそれを顧みず、いらずに氣がついたら直ぐ正念になつて南無阿彌陀佛の聲と共に南無阿彌陀佛の氣持になるやうにすればよいのです。

因果法と科學の基礎

(問)

佛誕二千五百年記念會編岩波發行の「佛教學の諸問題」中「佛敎の諸精神界に於ける地位及び其の將來」の中二十頁に「佛敎に於いては兎角自然現象を無常と見て迷妄にすぎないとするけれども、今日にあつては自然現象は無常ではあきれども決して迷妄と見るべきものはなからう。自然現象の實在性を認め、物理法の客觀的效果を肯定することは止むを得ないのである。尤も佛敎では因果法を認めて居るけれども因果法は全的に依つて發生して來たものとしてゐる。今日自然界に於て因果關係を認めるのは決して全的に依つて然りとするのではない。」とあります。「淨土」八月號に佛敎と科學の事が信仰相談に出て居りましたが、因果の考へ方は科學を入れ得るものではありませんが、科學を成立させるべき自我の働きを

何處に求めるのでせうか。

又た解脫と云ふ理想と、何事にも學問の堅固な土臺を持つて、現下の文化の各部分を更に發展させ、日本の目指す東亞共榮圈の確立世界平和の基をきづくと云ふ理想と、どう關聯がありませうか。以上學を成立させる根柢を中心として如何に解すべきか御教示下さい。(東京・芝・佐藤)

(答)

誰がその論文をお書きになつたのか知りませんが、そして唯だほんの一節だけですから意味がよく分りませんので、それに對して輕卒に批評することも何うかと思ひますけれども、何ですか、佛敎に對してよく理解して居る人の書いたものではないうやうですね。

佛敎の云ふ「無常」は字の示す通り「變化しつゝあり」と云ふことです。それを直ちに「迷妄なるもの」と云つて居るのではあ



りません。こちらがそれを「變化しない常恒のもの」と見て居ることそのことを「迷妄」なりとするのです。つまり私達の見かたなり考へかたなりが「間違つて居る」として居るのです。昔も今日もありません。それは永遠に事實です。

またその文の中の「因果法は全的に依つて發生して來たものとして居る」と云ふことが何を云つて居るのかよく分りませんけれども、佛教では「因果法」を絶對的な原理として居るものではありません。唯だ秩序をたもつ上に一應認めるだけのもので、本當には「緣起法」を以て根本原理として居るのです。因果法は緊の關係だけで横の關係を考慮の外に置いて居るものです。因果法は初學入門の爲のものです。だから「因果果」などと云ふ言葉もあつて「緣」そのものを度外しては事物の眞相を本當に把握することが出来な

いとして居ります。更にすゝむと「因」そのものさへ「緣」であり「果」そのものさへ「緣」であつて、一切は「緣」の離合集散に依つて現象されつゝありと云ふのです。

それで御賀ねの中心問題は「科學を成立させる自我の働きを何所に求めるか」と云ふこととのやうですが、科學の成立が自我と關係して居ると見て居るあなたのお意見が私にはよく諒解出来ません。ことそのことを見究めて行かうとする科學の建前が、自我思想と何う關係して居ると思はれるのでせうか、改めて御説明を承らないと、どうもよく分らないのです。私は自我の働きが科學を成立する基本になるとは考へて居ないからです。

次に「解脱」と云ふことを何うお考へになつて居るのか存じませんが、解脱とは煩惱の

束縛からぬけ出たことであり、隨つて私利私慾から離れた「背私向公」の生活の出来る根抵です。それから、無論文化の各部門の發展にも資するし、東亞共榮圈の確立も、進んでは世界平和の基礎にもなり得るものであつて、凡ての人が本當に解脱生活を理念とするならば、閑取引きや買ひだめ賣りおしみもなく、スラと國內的經濟問題も解決し、諸國も亦この佛教理念に立つ時、現在のやうな米英等の間違ひ切つた考へも訂正されて、日本の前に低頭しなければなるまいと思ひます。

要は無我になつて事そのこと、物そのものの眞相を探究し、學の各部門は勿論生活全體の推進力を押しすゝめ、正義擴充の基礎をかためねばなりません。それは佛教の「緣起思想」だと思つて居ります。

理想と現實との處置

(問)

極樂淨土とは三世を貫く生活の上に成立つ眞生の世界であり、

天地の生命たる吾々人類が、生々死々無量劫の將來に於て必ず到達すべき理想の世界

であつて、此の理想世界の實現の必然性と云ふことは、之を宗教的に考へて、既に成就せられたる十萬億土の彼岸の世界が、今現に存立すると云ふことの信仰と、觀念的にも撞着するものでないと思ひます。夫れは宛かも地球上に未だその光を到達させて居ない星の世界があると云ふ天文學上の認定を否定することが出来ないのと等しくはないでせうか。

以上の信念に基き、吾々は八紘一宇の理想世界の實現を肇國の精神とする日本國民として、此の世に生を受けたることの因縁

に、深く思ひを致し、その因縁に吾々の一切を委せ切り、そこに吾々の安心を置くと云ふことが、則ち南無阿彌陀佛であり、往生極樂の道であると思ひますが、以上の私の信念は間違つては居ないでせうか、御教示を願ひます。

(答)

(廣島・五日市・山口勇造)

大變結構だと思ひます。唯だそれを日常生活の中に常に起つて来る色々の問題に對して、事實上、御話しの信念が何時も躍動して居るか何うか。信念と離れて、これは別だと云ふやうに、別個の問題として取り扱はれるやうなことがありはしないか。

そこをよく反省して、それらの色々の問題が信念とは別だとして區別することのないやうにまで、おすゝめ下さるやう切にお願いいたします。

私達は兎角「是れだけは特別だ」としたがる癖があります。それは私自らだけの悪い傾向かも知れません。それを以てあなたにまでそれを煩はすのは失禮かも知れませんが、少くとも現に私の身邊及び周圍にさう云つた傾向が往々にしてありますので、萬一にもあなたにも若しさうした場合がありますならば、その邊のことを、御工夫願ひたいと思ひたいと思ひます。

理想と現實とは兎角相反するからです。之の矛盾を念佛實踐の中に圓滑に處置して行けるやう精々御精進下さいませやう、大勢の人々の爲に御願ひ致しますと同時に、さうしたこと解決を如何やうにすなすつたか、その御體験などについて御發表下さるならば有り難いことと存じます。

飲めば益々

元氣旺盛

無(にん)にく粉末(コナワサビ臭固形にん)く(そ)てつ粉末

子供の疳蟲によくさく

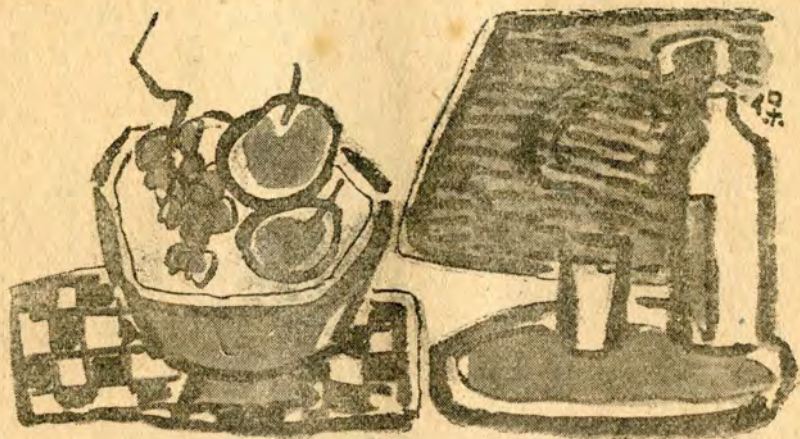
孫太郎蟲あります

特約店大募集

静岡市上谷谷町

神谷昌孝

電話二八六三番
振替東京一四六五一一番



小庵にて

子母澤 寛

この夏はいろ／＼な旅をした。北國の山の寒村の小さな驛のプラットホームの隅などに驛の人達が忙しい時間を拾つては丹精したらしい花壇に、草花の咲亂れてゐるのを見た印象が深く心に残つてゐる。殊に上越の土合驛あたりで霧の深い日に、一人の乗客も降客もない淋しい中に、眞つ紅な花が一ぱい上屋のない野天のホームの小砂利のところに咲いてゐた美しさは、未だに私を引きつけてゐる。來年の夏は、もう一度、必らずあの山國づたひの旅をして見たいと思つてゐる。

仙臺から莊内へ出る汽車の旅で山形邊りの村々の小さな温泉場の風景も、またこの驛の草花の花壇のやうに、佻しくも美しいものが澤山眼についた。川が流れてゐる。それもまるで碧色に見える流れの、小さな假橋の彼方などに、森の中に高い茅屋根を見せてゐる湯宿は、私どものやうな都會の人間が、本當に魂を休めるにはいゝところのやうな氣がした。

が行つて見たらば、或は意外な失望を得るかも知れない。元來東北の人々は素朴だ純朴だと云はれて來たものである。しかし私は今度の旅で、この考へ

方を修正しなくてはならぬのではあるまいかと思つた事が度々あつた。例へば、三等切符を持つて平氣で二等車へ納まつてゐる。どうもその態度がそれを意識してゐるやうに見えるので、私は私を案内して同車してくれてゐる鐵道局の人に、あれは知らずに乗つてゐるのでせうねときいて見たが、その答は、いやそうぢやありませんよ、皆んな知つてゐて圖々しく構へてゐるんですよ。それといふのが、こつちの車掌は、東海道などのやうに小まめに檢れななかをやらぬものですからね、それアこつちの人間の圖々しさといふものは大變なものですよといつた。私も、本當に、この人のいふのが正しい判斷のやうな氣がした。

秋田の能代で、ある人の大切にしていゐる鶯をきいた。餘りよくはなかつたが京口の鳴きであつた。東京へ近い秋田にしては、當然東京の文字口の鶯だらうと思つたのに、上方に傳つてゐる京口の鳴音をきいて不思議に思つたが、その持主はこつちの鶯はみんなこれですよといふ。どうしてとせう。どうしてと申されましても、こちらでは、鶯は、こゝろいふ風に鳴くものだと思つて居ります、尤も越後へ参りますと少し變つてゐてこれは越後口と申してゐますがといふ。

昔のこの邊は、江戸をぬきにして直接上方と船による交

易をしてゐたのである。考へ方によつては、江戸よりは大阪の方が近かつたかも知れない。そして、いつの間にか、京口の鶯が、東北の隅の國へ入つて來てゐた。交通系統を物語る面白いものだと思つた。

私は旅を終へるとすぐ、相州鶴沼の小庵に夏の休みを求めてゐる。去年二人の娘が前後して嫁入つて、その年の暮れに一度、私達を見舞つてくれた時に、この小庵の片隅に花壇を拵へて今度、おとう様おかあ様が、ここへ來られた時には美しいお花が澤山咲いてゐるやうにして参りませうと、姉娘二人で話してゐたが、如何にもいろ／＼な花が咲いてゐる。定めし春も咲いた事だらうが、これは私も妻も俗事に追はれてこの小庵には來る事が出来なかつたので見なかつた。それが散つて、夏の花だけが一ぱいである。ダリヤ、カンナ、それにいろ／＼な草花が交つてゐる。この花は姉娘が好きで、この花は妹娘が好きなのでございまして、と、老妻はその花の一つ一つを指さしては、二人の姉妹の花の好みを私へ語る。小さい花、黄色い花、紅い花、白い花、そんなものゝ上に、私は娘たち二人の姿を思ひ出して、たゞ、その幸福を祈つてゐた。

私の妹娘は、心が弱い娘である。運惡るゝ結婚式の十

日前から突然黄痘を病み、嫁入るべき家のいろ／＼な都合で無理に無理をしてやつとの事で式をあげたが、その後もふら／＼眼まひがする程なので、その静養のため主人と一緒に任地へ行く事が出来ず、十日ばかり遅くれて、主人の後を追つた。

私は、その汽車の窓に、新しく母と呼ぶべきお方やその他の人々に圍まれて、その窓の下のホームに産みの親達を残して行く娘の姿を見ると、どうにも胸がこみ上げて來てならなかつた。老妻も私の事を、おとう様はどうしてそんなに心がお弱いのでせう、遠く離れると申しても神戸ではございませぬか、八時間で參れるところでございまして、そつと私へ囁いた。私はいやさうちやアないよ、たゞこの娘は心弱い子だからさといつたが、涙があふれて來るのをどうする事も出来なかつた。何んにも云はなかつたら、涙が出なかつたかも知れないのだが――。

娘は神戸へ行つてからも、やつぱり黄痘の後を無理をしたのがいけなかつたと見えて、病氣ばかりして暮した。しかし、近頃は、その病氣もすつかりなほつたが、それより以上に、あの心弱い娘が、すく／＼と心丈夫に生長して行つてゐるのを感じられてゐる。夫を信頼し、その自分たちの

生活をつちりと營んで、さア何んでも來いといふやうなところが、その手紙の端々にも現はれるやうになつて來た。女といふものは、やつぱり人の妻となれば、變つて來るものだと思つてゐる。

姉娘が、夫と共に青森へ向ふ汽車を見送つた時は、私は、もう妹娘を送つた時のような悲しい思ひをしなかつた。本當に、たゞうれしさで一ぱいであつた。姉娘は、氣丈だし、根がしつかりしてゐる、あれならどんな困難に突當つても、びくともせずによつて行くだらう。自頃こう思ひ込んでゐた爲めであらう。海軍の軍人である夫のおとう様が、この嫁の手をにぎり、しつかりおやりなさいよと、片手で肩を叩いて激勵し、日の丸のついた扇子を開らいて、しつかりやれ、しつかりといつて送つてくれた。そして、御自分の息子さんたる夫へ、嫁を可愛がらんくちやアいかんぞ、自分の女房一人をさへ可愛がれんやうな奴ア御國の御役には立たんぞと大きな聲で叱るが如く教へるが如くに云はれた。この夏の旅では、わぎ／＼私は青森へ廻つて姉娘夫婦に逢つて來た。姉娘は、もうすつかり落着いて、いゝ奥さんになつてゐた。早いものである。

そして、母や姉たちやらの消息をきく間にも、生活についての女らしい話がある／＼と母へことづけして下さ

るやうにと、私へ頼むのである。餅は東京にございませうか、もうそろ／＼林檎も出来ますからお送りいたします。お漬物を仕方でもわからぬところがございます、これ／＼のところをおかア様から御返事下さいますやうにそんな話が出ては消え、消えては出る。そういろ／＼云つても、おとう様は覚えちやアをられない、お前、手紙を上げなさいよ。はい、でもなか／＼お手紙は書けませぬ、朝から用事に追はれてゐましてといふ。夫は傍らから、何アに、これは、朝から晩まで掃除ばかりしてゐるらしいんですよ、私はだらしがないので叱られてばかり居りますと頭をかく。一晩中、三人で笑ひつゞけて別れて來た。

娘たちと、この小庵で、夏を送らなくなつてから二年になる譯である。あの頃は、夕飯の時は、私達夫婦は五人の子と卓を圍んで貧しくも楽しいものであつた。今は、三人の俸を前にするだけでも、この樂しさに變りはない筈だが、何んとなく淋しい、花壇の花が何にかしら咲揃つてゐないやうなものを感じる。私がよくそれをいふと、老妻は、よく、そんな事をおつしやつては、作たちが氣を悪くいたしますからとたしなめる。しかし作達は、うちのおやちさんは子煩悩なんだね、僕たちがみんな戦地へでも行くやうになつたらどんな顔をするかなア、こんな話をして

ゐるのをきいた。

私は一人でくす／＼笑つた。そして老妻へ、私は作達が戦さにも行くなら喜んでむしろ元氣づくよ、男一生の晴れの御奉公ぢやアないか。われ／＼男はこの御奉公を爲るために生れて來るんだ。何にが淋しがるものか。が、娘たちは別だからね、嫁といふのは苦しむといふ字のような氣がしてゐるんだといつた。ところが老妻は、それはおとう様違ひますよ、女は、い／＼お嫁さんになる爲めに生れて參るのでございます。わたくしなどは若い頃からあなたに御迷惑ばかりおかけするお嫁さんでございました。けれども、い／＼お嫁さんになるために生れて來た娘たちが、そのお嫁さんになつて行くのは、男の子がお召しによつて御奉公に上るのと申さば同じ事でございます。それをおとう様は淋しがつてばかりゐらつしやいますけれども、お間違ひでございますよといつた。

今はい／＼お天氣の黄昏である。宵月が出てゐる。

私は老妻と、庭へ出て椅子へよつて、また娘たちの拵へて行つてくれた花壇の花を見つめてゐる。

鳥が晴れわたつた鼠色の空をいくつもいくつも、數知れず群れて寝ぐらへかへつて行く。

秋 たけなは

漫画協団

農繁期の社長

まき原賢次



「閑地利用で
この頃はとて
忙しんでネ……」



やもめ組長さん

川口久

エー
お集り
下さい
まして



いよい
よ秋た
けなは



晶も
よう實
りまして



エーそこで

方々
は……



や
八百屋の空地

山崎善一

「お前さん
早くしまひな
お店の品に
かゝはるぢや
ないか」



ZEN

芋屋の煙突

一 善 崎 山

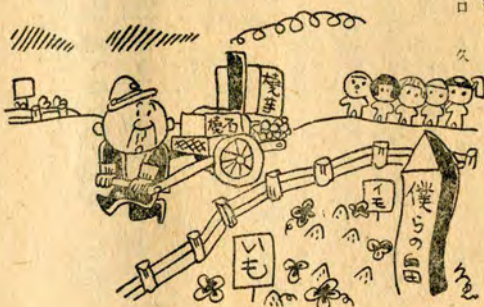
お爺さんでん外遊で来てい
てい？ハテナに何か
用が
あつ
たは
ずだが？お爺さんお
芋買つ
てヨ

ウンよし〜

おつと
そう〜サお芋はこれが
終つて
から
だヨ

子供陣組進出

川口 久

「たはッ
この秋は
賣れない
と思つた
ヨ」えゝすみません
わしも
追々々
心掛け
ますモチロン
そのオ
お嫁さ
んのこ
とでしてそのオ
お貰ひ
になつ
て……

店ポコル

唄の効果
「旦那の唄を
かけると居た客が
みんな歩いて行つて
しまふのですヨ」

をき原賢次



原賢次



實話原稿募集
四百字詰四枚以
内、實在の話に
限る、呈薄謝

蓮華を母とし

秋田市 木村 鈴 信

「一文不知の愚鈍の身になして」

と宗祖上人のお教へにあるを承知しながら、とても愚鈍念佛を申させていたゞくまでにゆかぬ私です。だから、ともすれば理窟や僅かばかりの學問を捏ねまわし勝ちになるので、とても未だ未だ眞實の信仰の世界をうかがふには道遠しの感が深いのであります。しかし私にはほんとに率直に信仰の世界を示して下さつた忘れれることの出来ない人があります。それは中村さんの老婆であります。このお婆さんは東北の雪國である秋田市台所町に古くからの暖簾を誇る中村雜貨御商のご隠居

さんでした。中村さんの一家は世間から羨望の的となるくらい。皆圓満に暮し、これもみなお婆さんの親切な心掛けによるものであると評ばんしてゐました。

お婆さんは皆のものにやさしくして暮してゐるばかりでなく信仰心も篤く、お念佛を申し申し暮してゐる人でした。だから、お寺に説教のあるやうな時はいつもお婆さんは參詣にゆき、長男から買つてもらつたといふ擴聲器のやうな小さなラッパを耳にあてて最前列に進んで熱心に法話を聴聞するのが常でした。大正年間に岩井智海上人に五重の相傳を

受けた外、前後三回も五重をうけたくらいで、平常からお念佛の生活をつゞけてゐました。いつの説教のことでしたか、お婆さんは「人間は生れるには母の胎内に宿り、極樂に往生致すには美しいとりんくの蓮華を母として生れる」

といふお話があつたのをいたゞく感銘してゐました。それ以來お婆さん「蓮華は未來往生の母である」といふことをしつかり心に抱いて、よく他の人にもさう語つてはほんとに嬉しうにしてゐるのでした。

二月といへばこの地方では身も心も縮み上るほどの寒さと吹雪の最中ですが、今年二月のこと、戸主長十郎氏の妻女が呆氣なく急逝しました。お婆さんは自分の老後を看病して貰ふつもりでゐた人に先立たれ、この時ばかりはお婆さんは大變落膽されたやうです。そしてその一七日の法要を終えた日の夜のこと、心配と疲労が積つたためかお婆さんは突然發病しました。みるみる内に意識は不明になり、脈博も絶え、僅かに幽かな呼吸が認め

られるだけとなりました。呼ばれて馳けつけた醫師は注射を幾本も打つて出来るだけのことをしてくれました。

それでも仲々反應をみせてくれないので残念ながら先づ絶望だと思はれてゐたのに、何うしたことでせうお婆さんは朦朧の内に眼を開き、呼吸が整ひ始めて來ました。丁度睡りから醒めたかのやうな様子で、取りまいてゐた家族や親戚の顔をまじ／＼と眺め廻しました。そしてしまいに孫の名を呼んでゐました。呼ばれて近づいた無心の孫を固く固く抱きしめながらこう申すのでした。

「私は暗い／＼闇路を遠く行きました。するとボツカリ光明の輝く所に到りました。ところが、眼の前に一と抱へ斗りもあると思はれる位に大きな美しい花の蕾が見えました。その何んとも云はれぬ美しさに見入つて、ああ不思議なことだと思つてゐると、蕾は自然と内の方から外に割れるやうに開き、その中から一七日前に逝つた忘れもせぬ優しい嫁さんの顔が現れ、そしてお母さん家内の人や、ト

ンちゃん(孫の名)を残して何うしてここに來たのか、疲く／＼家に歸つてトンちゃんを愛育して下さい、と云つて右の手でぐいと私を力強く押したので、私は押し戻されて來ましたよ」

と全く蘇りの状態で語りました。
お婆さんが平常から極樂参りの時は花から

父の死

大阪市 奏 秀 禪

よほど前から父が自分の死ぬ日だと自分で決めてゐた二十日の日に間のない十八日のこ

飾つてやつた三尊來迎の佛さまの方を見やりながらお念佛を申してゐた。

と、私は父を見舞つた。ここ一ヶ月ほどは何も食べてゐないと云ふことで、この前に見舞つた時に較べるとまるで相好が變つてしまつてゐた。私は一月で父が餘程衰弱したのを知つた。それでも父の意識は未だ明かであるらしく、すやすや眠つてゐたかと思ふと、俄かに思ひ出したやうに目を開いて、枕元に私が

生れると云ふ信念を持つてゐたのでこの信念を實感したわけだ。お話を聞いて、私はそれまで毎日何気なく讀んでゐた阿彌陀經にそれ以來と云ふものは云ひ知れぬ味はひを憶えました。そして法然上人の素直なお教へを信じ、その中に生かされてゐることを今更ながらしみ／＼と有難く思つたことでした。

あつた。そして父は私を得度してからも、修業のために中學校を卒へるまでは一度も家に歸ることを許さなかつた。そしてその間になくれとなく注意してくれる手紙の中に「東枕で寝ては勿體ない、極樂の方に足が向くではないか」と云ふ小言があつたのを憶へてゐる。私は今もつて「勿體ない」といふこと、「如來さまのおかけ」といふ氣持の強いのは父から直接に植えつけられた性根だと思つて有難く父のしつけに感謝してゐる。

その父も今ではこうして動けぬ位に病ひが重つてしまひ父の枕邊に來合せてゐた親類の人達から父が一切のことを事細かに遺言したといふことを聞いて、父も今ではただ佛さまのお迎えを待つてゐるのだと思つた。さう思ひながら瘦せおとろへた顔や手をみると、いよ／＼お別れだと云ふ感じばかりが胸に迫つて、自分の氣持が自分で何うにもならないのも仕方のないことだつた。しかし父が私を得度させた氣持を思ひ出すと、ただ悲嘆にくれてばかりゐるわけにはゆかなかつた。及ばず

乍らも父の善知識とならなければならぬと私は自分を勵ましながら、私はこう申した。「お父さん、今まではほんとに如來さまのおかけに生かしてもらひましたが、これからも如來さまにおすがり致します。只今お十念を授けますから受けて下さい。」

すると、父はさも嬉しうににつこり笑つて金剛合掌をするのだつた。そこに並居る人達も勿論のこと合掌し、方々からお念佛の聲が起つた。その念佛の聲のする中で私は臨終用意の六事の心得を語るのであつた。

第一にこの世界を厭離すること、第二に淨土を欣求すること、第三に本願を思惟すること、第四に攝取の光明を念ずること、第五來迎の儀を念ずること、第六に後生の得益のこと等次々と行儀に従ひ、懇ろに説明した。そして懺悔偈、發願文、十念、總回向文と次第に唱へ終つてから

「お父さん、今度お逢ひするのは、法然上人のお教へ通り、極樂の蓮の台ですね、今しばしのお別れです、さうなら、お念佛を申し

て下さい。」

と挨拶をした。この病人に向つてお念佛を申して下さいと云ふのは私の故郷の人々が病人に對する挨拶である。すると父は私に向つて「大きに御苦勞さま」と云つてにつこり微笑むのであつた。

私は父の容態が何うも心残りでは仕方がなかつたが、止むを得ない用事のためその日は家に歸つたのである。

こえて廿日の午后のこと、「あゝ今日は父が自分で死ぬと決めてゐたのだが」と獨り居室にゐて考へてゐると、その考への通り「父死んだ」の電報を受けとつた。

私は早速父のもとに馳けつけて行つたが、その時兄から父の臨終について知らせてくれた。父は死の直前に

「觀世音菩薩の御來迎である、起してくれ」と云ふので、兄はすぐ父を半身床の上に起してやつた。そして枕もとの一同が唱へるお念佛の中に、父は家族や親戚のものに向つて

一々挨拶をして、ことされたのであつた。

妙好人のこと

大阪府 吉 水 善 徴

泉州佐野町の後藤りつ子さんは、熱心な念佛同行人の家庭に育つた乙女であつた。彼女の父の所持する日課數珠の數珠玉はスリ減つてゐる位で、家族一同は稱名相續裡に家業に勵んでゐたのである。好事魔多しとか、彼女

しても承知しない。私は病人であるから、何時この世にお暇をするかも知らない、若し五重相傳にあづからず死んでは誠に残念であると一心にたのむのであつた。

することになつたところ、りつ子さんは日課一萬遍を申し出たのであつた。係員は吃驚して、あなたはまだ娘さんで、これから他家へ嫁入りされては日一萬遍の相續は六ヶしいでせうから、せめて五千遍位になされてはと云ふと、私は將來どんな生活をいたしませうとも、この有難いお念佛は必ず一萬遍相續いたしますから是非御記帳下さいと日課稱名一萬遍の誓約をしたのであつた。

が二十歳の春を迎へた時に、フトしたことか

て、如來の加護を祈りつゝ、易行坐禮の許を得て入行させたのであつた。さて愈々入行してみると、久しく病床にあつたりつ子さんが

かくて案じたやうなこともなく、遂に五重相傳を受け畢つたのである。その後しばらく再び病床につき、以前より多少重くなつたのも疲れが出たものらしく致し方がなかつた。

幸で五重相傳が修行せられ、彼女の家からは母親が會座に加入することゝなつた。ところが病床のりつ子さんが、この五重相傳には私が加入したい、私に勝縁を得させて下さいと申し出た。しかし何分にも病氣のことではあるし、五重相傳と申せば一週間に互る別時修行であるから次の機會まで待つやうに両親が口を揃へて諭したが、いつもなら口返答一つしない親孝行で知られたりつ子さんが、何う

同行家とともに一日數百禮の禮拜を立て修行してゐるではないか。これに驚いた両親は早速に、無理せぬやう諭し慰めたが、りつ子さんは「いや決して疲れはいたしません、唯々宿志を遂げさせて下さつたのが嬉しく有難くて涙が出ます」と云ふばかりであつた。

それで誓約した日課一萬遍の念佛相續は少しも怠ることなく毎日精進が續けられ、病氣の方は一向によくはならなかつたものの、りつ子の顔いろは何處となく明るいやうに見受けられた。そして口ぐせのやうに、御両親のおかけさまで有難いお念佛の道に入らして頂

るに當つて、行係が新受者各自の所願を記帳

述懐するのであつた。

きまして、これ程嬉しいことはありませんと

會 員 通 信

○：諸大德各位にお願い：○

教化實動の秋

是非支部の設立を！

會員各位の一方ならぬ御援助によつて本會は漸次隆昌を來し、皆さまの御鞭撻によつて努めて精進いたし、教化實踐に躍進してゐます。厚く御禮申し上げます。

さて現下未曾有の難局に打克つには國民の精神力の健全さにあるは申すまでもありません。この際私どもは皆々さまと手をとつて、一意宗祖の信仰にかへり、念佛の眞信仰を生かして、國民精神の趣く所を示すといふ重大な責務のあるのを痛感いたします。

ところで新に實施された宗國法によつても、檀信徒各位に對する

一層の教化實動に、或ひは國民精神の養成指導に、教界各寺院に期待するところは多々あります。これを機會に各寺院諸大德各位の中には寺院の事業の一つとして本會支部を設置し、以て「淨土」を伸介とする教化の實績を挙げられんとする御趣旨のあることを伺つてゐます。従つて本會に對して支部設立や會員勧誘その他につき種々お問合せに接しましたので、今度「本會趣意書」を作つて各寺院宛に發送いたしました。

來ました本會を一層充分に御活用願ひたいのであります。差當り一寺院一支部の設立を願ひ、本誌を伸介として寺院と家庭とを一層強く結びつけ、この支部の活動をいよいよ活潑ならしめて現代に即した寺院の教化事業として頂きたいのであります。これこそ宗祖上人の教をますます高めて、現下教界人の任務を充分發揮いたすものと確信致します。

信仰にめざめ、日常にまことの喜びを感じつゝ、あかるい生活を實踐すべく昭和十年に設立され、今では全國に會員が三萬人を突破するにいたりました。

◇…本會の目的は、法然上人のおしへを中心に、お寺、或ひは篤信の方を介してお互に勵みあひつつ信仰修養につとめ、手を握りあつて確固たる生活にこそしむのにあります。しかし長い時間をさいて集ることは色々の關係上仲々困難であります。それゆへ本會は各御家庭に、僅かな修養の一ト時を作つていたぐため月刊雜誌「淨土」を發行してゐます。これを讀んでいただくことによつて、集ることの出來ぬ時間をおぎなひ、或ひは座談會、輪讀會を催すのに「淨土」の内容を課題として最も有効に活用願ふわけであります。かや

趣意書の概要

うにして一人でも多くの方々が共に喜んで力強い生活にいそしんで頂きたいのであります。

◆……本會の事業は雑誌「淨土」の發行のみでなく、修養の實踐に又は法然上人御遺徳の宣揚のため映畫や劇や小説や圖書出版、又は講演會など、あらゆる文化機關を通じて努めてゐます。

特志寄附者芳名

左記の如く本會事業資金にと特志寄附下さいました。

一金一圓也

横濱市鶴見區榮町二ノ一〇三

太田 守彦殿

一金一圓二十錢也

東京市大森區堤方町

吉田 佐吉殿

一金五圓也

横濱市鶴見區市橋町一五八八

佐々木 戒淳殿

◆……特別會員は、多額の獻金をして下さる方であります。

◆……普通會員は、入會申込みと同時に一ヶ年分の會費金一圓二十錢也を前金でお拂ひ込み下さる方であります。會員には毎月「淨土」をお送りいたします。(新入會御申込みは直接本會宛に、住所氏名を御明記の上、會費をそへて何月號より送れと御申込み下されば結構です)

◆……維持會員は、本會事業の發展のため一口(金三十六圓)以上御寄附下さる方々(一時納めでも、分納でも)であります。

特別會員、維持會員の方は終身會員として毎月「淨土」をお送りいたします。

支部の設立には

會員五名以上お出来になれば支部の設立が出来ます。支部會員に

は本會から直接雑誌を送るのと、支部長宛に括めて雑誌を送るのと二通りがあります。また會費の納入も、支部會員から直接本會に納入するのと、支部長が括めてから納入下さるのと二つの方法があります。(何れの方法でも結構ですが何れかに決めていただきます)

御住職又は、篤信の方がお世話下され支部をお設けになり、同じ喜びの生活にいそしまれる方々と手を握りあつて一つの團圓をむすび、お互に勵み合ふことは、信仰の向上にとつてまことに結構なことでないでせうか。是非支部を御設立下されて信仰にもとづく報國忠誠の道に邁進されますやう、とくにお願いいたします。尚ほ支部の集會などに、もし講師の必要をのぞまれる場合は本部に連絡下されば、實費による出講の御斡旋

をいたします。

法然上人鑽仰會

誌友會御案内

どなたも御來會下さい

月日十月二十日午後六時より

場所小石川區大塚上町七西信

寺(市電、大塚仲町下車)

プログラム おつとめ、講演

中村辨康師(豫定)、紙芝居

濱野義光師、宗祖一代記幻

燈(説明)佐藤良智師、座談

會(司會)栗本俊道師

法然上人鑽仰會

趣意書 お贈りします

見本「淨土」

新入會員御勧誘のためお入用の際は、趣意書、お申込用紙、見本「淨土」等をお申越み次第お贈りいたします。何卒これらを御活用の上一人でも多く會員を御紹介下さい。



浦和清水美江

トマト掌に妻菜園の朝を賞つ

美しき夜空召さるる友を訪ふ

甘味戀ふ酒なき夜々の父となり

評 句は高雅に行きたい、これは我々の希望所である。清水氏の句振りについて見られたい。

俳句は上品、川柳は下品と褒言じみた事をいふものが一時あつたが、これは自分の無知を現はす以外の何物でもない。天保以後、明治三十五年までの所謂狂句を川柳と誤認した人はカナリ多い。その狂句すら高きと稱し上品にと心かけて居たり、中書と稱へ、人情の機微を探らうとして居た。

小橋市 平井正念

齒車の様に戻らぬ今である

評 單に車と書はす、齒車と出た所に作者の意圖が窺はれる、何か人生の急所を掴まうと企ててゐられる一つの現はれ。

島山町 萬壽玄海

朝顔の紅きに見入る静かさよ

評 佳しと大きな聲でいふ。紅い朝顔は俗つて居るときは、併しコッパの心が澄んで居るときは、それまで淨化してしまふ、その朝の一時、それは嬉しい情

景である。

胃袋のありか辿つて氷水

評 細田サンはじめて佳句を出した、こ

こへ来なくては嫌だ、細田サンは私の生家の近くの人ださうだが、私はまだドナ方だから知らない、しかし私は句について遠慮を知らない人間で、

同一作者の、打つ氣無く學園に息のかかりすぎ、世の中の判らぬことがふえて行き、にはまだだナと思つた

東京市 三野輪幸節

行列はつらいが茄子はありがたい

評 コロンバン、風月、トリコロル、ふ

じや、さんど、に其辛らさを味はつて居る私は、まだ足が茄子の方に及ばぬが、そのつらさは判る、その心臓は判る、

ことに判る、茄子一つの尊さが判る、

ついで賣りに来た八百屋が一錢(一錢デスヨ)に茄子が百個では清くないとこぼした事がある、そんな事を知つて

るだけに餘計の句から、ある感じをうける。

福岡 高柳噴水

アンテナにささへられてゐるやうな月

評 葉牡丹のひ方、嬉しい一つである、こ

北足立 小澤界照

干柿の影この角へ折れ面白し

評 原句、干柿の影面白し部屋の内、句は

チヨツと細工すると面白くなる、その一例に一寸御覽に入れ。

深川 山田 教道

夏の月井戸の西瓜へ笑ひかけ

評 原句は夏の晝書西瓜が浮井戸の中、そ

れでは夏のはかりに當り前すぎる、西瓜が井戸に浮んでる事を、他の方法で現はしてこそ川柳なのである。

伊勢 一愛 讀者

かくれんぼ保母はいつもの鬼にな

評 原句は、かくれんぼ保母はいつも鬼

になり、いつものと直して見た、お考へを願へば幸甚。

浦和清水美江

論文を書く禪寺の室を借り

評 柳木大輪

朝顔の葉を宿にして蛙明け

評 南行徳 境 静 泉

新嫁の呪かしく居る乳の黒み

大阪府 松崎三祝

畫の菜指でつまんであの話

評 原句、畫の菜指でつまめる間、

山梨 程原一幸

泣いて居る子に犬の子の不思議そ

世田谷 米内山 千代子

煩惱も楽しみとなり夏嬉し

北海 道花田 順往

沖もよし磯の香もよし酒もよし

醇酸島 富岡 程一

辨當も蒸し麵麩ですむ奉公日

島山町 大輪 云海

友呼んだせいかどうやら蟬逃げる

山梨 程原一幸

真夜中を一人ぼつちのお月様

柳木大輪 清

足並が揃ふ生徒の歌となり

青森縣 平岡 泣石

梅千せる庭に一輪コスモスの花

小橋 平井 善慈

世の中にみんな生きたいものはか

東京 三野輪幸節

死ぬことは知つてゐるけど怠けて

浦和清水美江

スフを着て妻は物價の事にふれ

浦和清水美江

はがきに一回句数に制限なし(浄土)粗服部柳壇係あ

てに送ること

投稿規定



聖典
講義

佛を見るもの

— 觀無量壽經眞身觀文(その四) —

中村 辨 康

(七) 佛とは大慈悲

起信論に依ると、應身の佛は凡夫の聲聞緣覺の所見であり、報身は菩薩所見の佛身だと云つて居ります。つまり應身は謂ゆる應化身で、例へば觀音が三十三身を現するやうに、對手の姿に應同して衆生濟度の實蹟を擧げやうとする佛自らの働きかけでありますが、報身の方は酬因感果の佛であつて、菩薩自らの六波羅密などの修行によつて感知する佛身として、こちらの信眼が廣く且つ大きくなればなる程、報身のお姿が擴大され、遂に菩薩の終極に達すれば佛身と一つになり切つて成佛に至るのだと云ふのです。

然し之は聖道門的立場を離れて居ないからこそさう云ふのでせうが、この觀經の眞身觀文から見れば、何も敢て六

波羅密等の修行に待つまでもなく、念佛の衆生を攝取して捨て玉はぬと云ふ特別の誓願に依る佛自らの働きかけに依つて衆生の方へ無量壽無量光を示現し給ふものであることであります。

一としきり「觀佛見佛論」が盛んであつた頃、誰が見た彼が見たと大騒ぎをした事がありました。それに刺戟されてどのくらゐ念佛信者が出来たかわからないのでした。然しその多くは影像を見たものであつて、謂はゞ觀佛の程度に過ぎなかつたやうです。

と云ふのは「觀」と「見」とは全然異つて居るからです。「觀」は私達が肉眼で見えるやうな影像を、腦髓からの刺戟で眼底の網膜に書き出されたものを、向ふに再現するもので、訓練に依つては誰にでも可能なものなのです。年齢

などにも大きな關係がありますが、信仰よりもむしろ精神訓練なのです。

ところが「見」の方は、全く今までの經驗を越して居るのです。謂はゞ「體感」とでも云ふべきもので、肉眼的な「見る」と云ふ状態では全然ないのです。謂ゆる「一枚」であつて自他の分別想のなくなつた境界です。

この當時かう云つた批評に對して、自分達のは「觀佛」ではない。觀佛三昧法には依つて居ないからだと辯護してをりましたが、方法などは問題ではありません。事實内容が影像的であるかぎり、それは「觀佛」の範圍を出でないものです。

殊に「佛身を見るものは佛心を見る」とこの經文にありますやうにそこに「大慈悲」を感じるものがなくてはなりません。それは次ぎのやうな關係の

佛身 || 佛心 || 大慈悲

「佛身即大慈悲」であらねばならないからです。

善導大師の「定善義」の「眞身觀」の下には、何故に念佛する者のみ攝取するのかと云ふ間に對して、それは「三緣」に依るからだと云つて居ますが、その「三緣」とは

一、親緣。衆生が口に佛を念すれば佛また之を聞き玉ふ。

衆生が身に佛を禮敬すれば佛之を見玉ふ。

衆生が心に佛を念すれば佛もまた之を知り玉ふ。

衆生が佛を憶念すれば佛もまた衆生を憶念し玉ふ。

かくの如く佛と衆生との身口意の三業が互ひに離れないから之を親緣と云ふ。

二、近緣。衆生が佛を見んと願へば、佛はその願ひに應じて目の前に現はれ玉ふから近緣と云ふ。

三、増上緣。衆生が佛名を稱念すれば多劫の罪が除かれて、命終の時、聖衆と共に佛自ら來り迎へ玉ふ。たとへ何んなに重い障があつても此の強大的緣の縁を邪魔し得るものがないから、之を増上緣と云ふ。

と云ふことで、つまりは如來の大慈悲そのものを明示したものです。

ですからその次ぎの處に「佛心とは慈悲を體となす。此の平等の大慈悲を以て普

く一切を攝す」

とも云つて居ります。

此の故に信眼に映る佛心は、たとへそれが天地一杯に満ちて居る光明相の色相でありますにせよ、そのまゝ大慈悲として體感されるものでなくてはなりません。

本文には

「佛身を觀るを以ての故にまた佛心を見る。佛心とは大慈悲これなり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝したまふ」

と云つて居ります。

謂ゆる「色心不二」であつて、私達のやうな眼の見えな
いものが、自分のまづしい經驗範圍での考察などでは到底
憶測することも出来ないのですし、限られた言葉や文字を
以ては説明することも出来ないのです。

成る程、口では「色心不二」と言ひ得ますけれども、私
達は日常に

五感に依るもの——色(物質)

第六感以上のもの——心(精神)

と區別することに馴れて居りますから、實感上には「色心不二」の感じは出て來ないのです。

だから一から十まで「持つて居る」とか「持つて居ない」とか「有る」とか「無い」とか云ふ「存在觀念」や「所有觀念」にのみ捉らはれて「買溜め」をしたり「開取引」をしたりしないと「都合が悪い」と考へてを實際に行つて居るのです。口には忠誠を叫びながら、事實は國策に
もとり、臣道をも全うすることが出来ない有様なので
す。情ないではありませんか。

ですから何うしても本當の「正見」に住して正しい生活
を樹立しなければなりません。それには何と云つても信眼
を開かせて「佛身即佛心」を感得し、佛の大慈悲に感泣し
得る身とならねばならないと思ひます。

如來様の大慈悲は「無縁の慈悲」であります。無縁とは
「縁なし」と云ふことでなく、一切平等に餘すところなく
缺くることなき「縁」が慈悲と云ふ關係のもとに結ばれて
居ると云ふことであつて、天地全體を包含し、一切に覆ひ
かぶさつて居ることを云つたものです。

經に「光明遍照十方世界」と云つて居るのがそれです。
餘りにも普遍的であり餘りにも一般的でありますから、信
眼なきものには、それに氣付くことが出來ないので、宛か
も「無縁」の如く思はれて居るけれども、流浪して居る不

良^よな子^こ供^{ども}の上^{うへ}に常^{つね}に親^{おや}の慈^じ悲^ひが覆^{おほ}ひかぶさつてゐるやうに、十方^{じふぱう}光^{くわう}被^ひの事實^{じじつ}は儼^{げん}然^{ぜん}として常^{つね}に展^{てん}開^{かい}されつゝあるのです。私^{わたし}達^{たち}はそれ^{それ}を今^{いま}まで知^しらずに居^ゐたのですが、一^{ひと}たび念^{ねん}佛^{ぶつ}に依^よつて心^{こころ}の眼^めがあいて來^きますれば「無^む縁^{えん}」どころか「親^{しん}縁^{えん}近^{きん}縁^{えん}増^{ぞう}上^{じやう}縁^{えん}」の最^もも近^{ちか}く最^もも親^{しん}しい強^{きやう}力^{りき}な「縁^{えん}」として私^{わたし}達^{たち}に認^{にん}識^{しき}されて参^{まゐ}ります。それが即^{すなは}ち正^{ただ}しい「信^{しん}」の事^じ實^{じつ}なのです。つまり佛^{ぶつ}の「大^{だい}慈^じ悲^ひ」を少^{すこ}しでも感^{かん}得^{とく}したものが「信^{しん}」を得^えた人^{ひと}と言^いはれるのです。

(八) 無生忍を得る

一^{ひと}とたび如^{ごと}來^{らい}の光^{くわう}明^{めい}身^{しん}相^{しやう}を知^ち見^{けん}し、少^{せう}分^{ぶん}ながらも如^{ごと}來^{らい}の大^{だい}慈^じ悲^ひを感^{かん}得^{とく}し得^えたものは、如^{ごと}來^{らい}攝^{しやく}取^との中^{なか}にはぐゝまれて居^ゐることを體^{たい}感^{かん}して居^ゐるのですから、つまりは無^む量^{りやう}壽^{じゆ}の中^{なか}に居^ゐる譯^{わけ}で、隨^{ずい}つてたとひ此^この五^ご尺^{しやく}のからだは何^{なん}うならうとも、私^{わたし}の本^{ほん}體^{たい}たる法^{ぽう}身^{しん}は永^{えい}劫^{きやく}に滅^{めつ}することなく、また三界^{さんがい}六^{りく}道^{だう}に流^{りう}轉^{てん}することなく、常^{じやう}恒^{こつ}に如^{ごと}來^{らい}様^{やう}の「大^{だい}みいのち」の中^{なか}に生^{なま}され且^{かつ}つ生^{なま}き行^{ぎやう}くことを確^{かく}信^{しん}するに至^{いた}ります。是^これ「無^む生^{じやう}忍^{にん}」を得^えた人^{ひと}と云^いつても差^さ支^しへないのです。りませう。

「無^む生^{じやう}忍^{にん}」とは元^{もと}來^{らい}聖^{せい}道^{だう}門^{もん}に説^とくところのもので「無^む生^{じやう}無^む

滅^{めつ}の理^りを認^{にん}知^ちした」地位^{ちゐ}に名^なづけるものであつて、この「忍^{にん}」を得^えたものは佛^{ぶつ}道^{だう}を進^{すす}む上^{うへ}に「不^ふ退^{たい}」であるとして居^ゐるのですが、經^{きやう}典^{てん}に依^よつてはその地位^{ちゐ}に異^いりがあるやうであります。

即^{すなは}ち占^{せん}察^{さつ}經^{きやう}には「十^{じふ}信^{しん}の前^{まへ}の凡^{ぼん}夫^ぶ位^ゐ」と云^いひ、華^け嚴^{げん}經^{きやう}では「十^{じふ}信^{しん}位^ゐ」と云^いひ、璣^ぎ珞^{らく}經^{きやう}では「十^{じふ}住^{ぢう}位^ゐ」と云^いひ、仁^{にん}王^{わう}般^{はん}若^{じやく}經^{きやう}では「菩^ぼ薩^{さつ}の七^{しち}八^{ぱつ}九^{きう}地^ちに在^あり」と云^いつて居^ゐります。それで「釋^{しやく}淨^{じやう}土^ど群^{ぐん}疑^ぎ論^{ろん}」では

「無^む生^{じやう}忍^{にん}に六^{りく}位^ゐあり。一^{いち}に開^{かい}慧^ゑは十^{じふ}信^{しん}の前^{まへ}に在^あり、二^にに生^{じやう}勝^{しやう}解^げは十^{じふ}信^{しん}の後^{のち}に在^あり、三^{さん}に思^し慧^ゑは十^{じふ}住^{ぢう}の後^{のち}に在^あり、四^しに修^{しゆ}慧^ゑは煖^{なん}の後^{のち}に在^あり、五^ごに證^{じやう}得^{とく}は初^{しよ}地^ちに在^あり、六^{ろく}に相^{さう}續^{じやく}は八^{ぱつ}地^ちに在^あり、これ因^{いん}中^{ちゆう}に在^あり、佛^{ぶつ}果^{くわ}は圓^{えん}滿^{まん}す」と云^いつて居^ゐりますし、法^{ぽう}華^け經^{きやう}玄^{げん}贊^{さん}には

「瑜^ゆ伽^か論^{ろん}に初^{しよ}地^ちを説^とくは初^{しよ}得^{とく}の位^ゐに據^よる。長^{ちやう}時^じは七^{しち}地^ちに在^あり、相^{さう}續^{じやく}は八^{ぱつ}地^ちに在^あり、圓^{えん}滿^{まん}は佛^{ぶつ}地^ちに在^あり」

などと言^いつて、大^{だい}變^{へん}重^{じゆう}く見^みて居^ゐるやうであります。

然^{しか}し念^{ねん}佛^{ぶつ}の信^{しん}に立^たつ時^{とき}は聖^{せい}道^{だう}門^{もん}に言^いふやうにむづかしい修^{しゆ}行^{ぎやう}を待^{まち}たなくとも得^えられることが明^{あき}らかに示^{しめ}されて居^ゐります。則^{すなは}ち此^この觀^{くわん}無^む量^{りやう}壽^{じゆ}經^{きやう}の初^{しよ}め

「心^{こころ}歡^{くわん}喜^ぎするが故^{ゆゑ}に、時^{とき}に應^{おう}じて即^{すなは}ち無^む生^{じやう}法^{ぽう}忍^{にん}を得^えん」

と云つて居るからです。善導大師は之れを

「阿彌陀佛國の清淨なる光明が眼の前に現れるとき、何うして喜びの踊躍に勝へられやうぞ。この喜びに依るから無生の忍を得るのである。この忍は亦た喜忍とも名づけ、悟忍とも名づけ、信忍とも名づける。是れ十信の中の忍なり」

と解釋を下して居ります。

私達は決して聖道門流にむづかしく考へる必要はないと思ひます。すべてを「無量壽」なる如來様におまかせし、私の「いのち」をまでお預けして居るのですから、是れ以上安心なことはありません。現に「南無」と云つて居る氣持は、その南無は「歸命」即ち私の小生命を如來無量壽の大生命の中に歸一せしめる「發願同向」でありますから、何も心配はいらない筈であります。このやうにすつかり歸依し切つて居るのに、今さら何をボヤ／＼とうろついて苦惱したり心配したりする必要があるのでせうか。それならばまだ委かせ切つては居ないのでしかありません。殺すも殺さないも向ふ様次第ではないですか。大生命の中に合一させた方がよいと覺召さば、それでもよろしいし、まだもう少し分けたまゝにして置いて「働けよ」とおつしやるなら

それでもよろしいし、何れなりとも如來様の覺召しの通りにして頂けばよいのですから言はば死ぬも生きるも御勝手次第であつて、こちらとしては親船に乗つたやうな氣持ちであり、決して悪いやうにはして下らないであらうことを確信して居るのですから誠に安心なものであります。

もう少し苦勞させた方がよろしいと覺召すならば、その苦勞も甘んじて受けませう。少しの辛棒です。さう何時までも見殺しにはして下らないでせう。

「詔」を承けては必ず「謹め」と聖德太子様も十七條憲法で教へて下さいました。陛下の大詔を頂く身としては、一切を捧げて惜しくない氣持でなくてはなりません。

それと同じことです。何も心配することはないでせう。大みいのちの中に生かされて居る身として、凡べて仰せのまゝに従つて行けばよいのです。この氣持は日本人にして容易に理解出来る氣持です。

だから日本人にして初めて如來への信に依つて容易に「無生法忍」を認知させて頂くことが出来るのだと思ひます。

無量壽の中に生きる！

これ「無生忍」でなくて何でせう。それが十信位であら

うが、初地しとちの位ゐであらうが、そんなことの穿素せんそなどは無駄むだな話はなしだと思おもひます。

(九) 諸佛を見る

經文きやうもんに

「無量壽佛むりやうじゆふつを見る者は即すなはち十方じふぱうの無量むりやうの諸佛しよふつを見る。無量むりやうの諸佛しよふつを見るを得えるが故ゆゑに諸佛現前しよふつげんぜんに授記じゆきしたまふ。是これを徧まじく一切いさいの色身しよくしんの想さうを觀かんすとす」

とあり、その前まへのところに

「光明相好くわうめいさうかう及び化佛けふつのことはくはしくは言いへないから心眼ごんみで見なければならぬ。此この事ことを見る者は十方一切じふぱういさいの諸佛しよふつを見ることが出来るであらう」

と云つて居りますやうに、無量壽佛むりやうじゆふつは諸佛しよふつの母ははでありますから、たとへ諸佛しよふつを見なくとも諸佛しよふつを見たと同様どうようでなければならぬ筈はずであり、随したがつて諸佛しよふつは現前げんぜんに私達わたしを保證ほしごう(授記じゆき)し玉たまふべき筈はずであつて、一々具體ぐたい的に授記じゆきされなくとも授記じゆきされたと同様どうようの自覺じかくと立ち得えるのだと確信かくしんします。

猫ねこの子こが猫ねこになり、人ひとの子こが人ひとになるやうに、無量壽むりやうじゆの佛ほとけの子こが佛ほとけにならぬ筈はずはありません。また人間にんげんの子こが何時いつまでも赤ン坊あかぼうで居る筈はずがないやうに、私達わたしも信仰しんかうに依よつて

如來にょらい様さまの子ことして念佛ねんぶつさせて頂いただいて居る以上いじやう、何時いつまでたつても成人せいじんしない筈はずはありません。私達わたしはまだ眼めも見えず、耳みみも聞きへず、獨歩どくぽきは出來できませんけれども、念佛ねんぶつと云ふお乳ちちをのんで居る限りかぎり、何時いつかは眼めもハツキリと開あくでせうし、耳みみももつとハツキリときゝ分わけられるでせうと思おもひます。

誠に此この觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの眞身觀文しんじんらんもん、文字もんじは唯ただだ三百九十四字じしかありませんが、その示唆しそするところは多大ただいであり、幾多いくたの信仰資料しんかうしりょうに富とんで居ります。

私わたしはいまだゞごくわづかの諸點しよてんだけしか擧あげ得えませんでしたけれども、こ

れらに依よつて此この經文きやうもんを讀誦どくじゆして頂いただき、もつともつと

信心しんじんを掘ほり下さげる

よすがとして頂いただく

ならば筆者ひんしやの幸さいせは此このの上うへもありま

淨き友の會 信仰坐談會案内

一、日時 十月五日(第一日曜)午後七時
十月十九日(第三日曜)より

一、講題 大乘起信論 中村辨康先生

一、場所 東京市本郷區東片町七八 (白

山) 橋本方

(電話小石川 四九七六)

(來聴歡迎) 淨き友の會幹事

編輯後記

◇二百十日もことなくすんで、ほんとに結構でした。一時はまるで天がわれわれの力を試すかのやうに次から次に悪天候が續きました、何うやら天候も恢復してホツトしました。

◇この分ならば平年作に近いとのこと、これまでにした官民一同の努力は大したものでした。長年に互つて培はれた農村の底力には敬服します。

◇都會の人は黙々として働き續けてゐるお百姓さんの有難みがよく判つたことと思ひます。歩け、歩け」と唄にまで歌はなくてはいけないくなつた都會の人達は大いに反省すべきでありませう。

◇統制その他が段々強化されて來ました。これが何んなに強化されても唯われ／＼は早くこれと歩

調を合せるやう努めるだけです。

或る目的のために配給等の統制や制限をすれば、何うしても不足なところや餘分なところが生じて來ます。この過不足を出来るだけ少なくして圓滑にゆくやうにするには矢張り一人一人の心掛けに待たなくてはなりません。

◇萬一にもその裏をゆくやうな人が出ないやうに、われ／＼はお念佛の徹底に努める責任を感じます。お念佛を唱へる人には、少しでも悪いことは決して出来得ません。お念佛で社會を淨化させよう。お念佛を來世のためばかりと思ふのは間違です。お念佛はその人の修養であり、従つて社會の淨化を目指すものです。

◇人智の進歩によつて歐洲の小田舎の出來ごととも直ちにわれわれに響いてきます。お互にしつかりと立ちおくれぬよう、少しでも油断なく進みませう。信仰なきと

ころに一億一心の底力は充分發揮出来るかと存じます。

◇御多忙の折から吉田絰二郎先生から相變らず玉稿を頂き、深謝いたします。

◇高瀬永蔵氏の「お十夜隨想」は同氏得意のお話して、それだけ興味深いものです。

◇子母澤寛氏から「小庵にて」を寄せられました。いつもながらきびた旅日記といふところでせう。

◇西村伊作氏の「自分を何うする」は過般「生きてゐる自分」の續篇とも云ふべきで、同氏の内省の程がうかがはれます。

◇榮久庵元藏氏の「病者の悩みに應へて」は會員諸氏からの御希望によりお願ひしたもので、これは亦同氏の體驗談です。

◇「信仰相談」は紙面に制限があつて、質問を受けとつた月日の順にお答へしてゐますので、發表の遅れ勝ちなのを御諒承下さい。

淨土 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年九月三十日印刷納本
昭和十年十月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野 正 順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤 尾 光 雄

東京市牛込區櫻町七
印刷所 大日本印刷株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元

日本出版配給株式會社
發行所 法然上人齋仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ヶ年 (送料共)

廣島文理科大学教授
文學博士

山本幹夫著

新刊 法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛
教を歴史的に解明す。時局下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つて初めて萬民翼賛の教法として
現れ大成されるまでを總ゆる資料により解明されてゐる。

先づ日本佛教と日本國體とを中心にして、神國日本の教法として
佛教が展開し來つた史的實相を示す本書こそ、淨土教徒のみなら
ず廣く萬人の知らんとするところである。わが國ならではと思は
しめる新宗の開創の根據を説いて餘りなし

わが國體思想からみた
法然佛教の新しい基礎づけ

A5型クローズ装箱入
價 二圓二十錢
送料十錢
會員に限り
送料當方負擔

目次

序論
一、法然佛教の前提
二、法然佛教の機構
本論
第一編 日本と日本佛教

三、神の國と人の國
四、神道と佛法
五、天照大神
六、祭政・教一如
七、國體と國民道德と教學
八、肉身的と法身的

第二編 日本佛教の展開

九、佛教の公傳以前
一〇、佛教公傳紀とその背景
一一、日本佛教の發足
一二、十七條憲法
日本佛教の原理
一三、國家佛教
一四、國家佛教の内外
一五、平安佛教の歸結

第三編

一六、法然佛教序觀
一七、新宗開創
一八、法然上人の宗教體系
一九、選擇本願念佛
二〇、平等の慈悲
二一、萬民翼賛の教法

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年九月廿日印刷納本 昭和十六年十月一日發行

淨土第七卷第十號

定價金十二錢（送料）
滿鮮等金十三錢
外地定價金十三錢（五厘）

振替東京芝區芝公園八二一七八番
東京芝區芝公園八二一七八番

發行所 法然上人鑽仰會